

人間文化研究

第 23 号

論 文

- リテリング活動が学習者の気づきと
インプットの質に与える影響の探究
——多読指導における学習者の省察記述分析を通して——
..... 釣 井 千 恵 (1)
鄭 京 淑
斉 藤 倫 子

実 践 報 告

- 日本語教育を学ぶ大学生と日本で働く外国人との交流会
——日本語教師を目指さない学生に
日本語教育課程が提供できること—— 大河内 瞳 (31)

翻 訳

- 朝鮮漢文短編小説集 (V)
人の性と情篇 (下) 梅 山 秀 幸 (59)
-

2025 年 10 月

桃山学院大学総合研究所

リテリング活動が学習者の気づきと インプットの質に与える影響の探究

——多読指導における学習者の省察記述分析を通して——

釣 井 千 恵
鄭 京 淑
斉 藤 倫 子

1. はじめに

本研究は、外国語（本稿では英語）の運用能力の習得を目指した学習、または教育において、異なるモード（いわゆる「インプット」と「アウトプット」）をどのように取り入れるか、そして自然なインプットを豊富に得る手段として注目されてきた多読指導の中で、学習者の言語運用能力を促進する授業内活動について検討するものである。特に、インプットの質を高めることを目的としたアウトプット活動としてリテリング（再話）の練習を導入し、活動後に記入された学習者の自由記述式回答の内容から、学習者の気づきとその変容を考察することにより、多読指導におけるアウトプット活動の教育的意義とその可能性を議論することを目的とする。

リテリングとは、初見の英文を読んだあと、または英文の内容理解を終

キーワード：多読指導, リテリング, 言語処理プロセス, インプットの質,
自由記述式アンケート

えたあとに、その内容を自分の言葉で言い変える練習であり、「話す」機会を確保できる活動として導入されることが多い（佐々木，2020）。本研究では、インプットの質を高めることを意図し、学習者の気づきを促す活動という視点からリテリング練習を取り入れた。本研究に協力してくれた受講生は、多読学習内のタスクとして、読んだ多読本の内容を自分の言葉でまとめ、聞き手（1人または複数人）に英語で伝える練習（リテリング）を行った。その一連の活動の後に、受講生には Microsoft Forms（以下、フォーム）を通して活動記録を記入してもらった。

本稿では、その記述内容を分析し、学習者がどのような気づきを得たのか、また、その気づきが後の読みの活動にどのような影響を与えたのか、さらにその変化を学習者自身がどのように認識していたのかを考察する。アウトプットがインプットを促進し、その質を高めるという関係に着目することで、英語教育における効果的な指導方法の追究に寄与することを目指し、「外国語としての英語」学習者の特性を考慮しながら、具体的な指導方法を提案し、リーディングスキル、ひいては外国語運用能力の向上に資する示唆を提供することを目的とする。

2. 先行研究

本研究は、日本語を母語とする学習者（または日本語を共通の言語とする学習者集団¹⁾）を対象にした「外国語としての英語」教育の文脈において、英語多読指導におけるアウトプット活動がインプットの質をどのように高めるのかを探究するとともに、リーディングスキルの向上に対する学習者の認識の変容を調査することを目的としている。そこで、アウトプットとインプットの関係性に焦点を当てた理論的・実証的研究を概観し、特に音読とリテリングという二つの具体的なアウトプット活動に着目して、その効果を検討する。

2.1 アウトプットの重要性和インプットとの関係

第二言語習得（SLA）研究においては、学習効果を最大化するためには、インプット（読む・聞く）とアウトプット（話す・書く）のバランスが極めて重要であるとされる。インプット中心のアプローチが伝統的に重視されてきた一方で、Swain（1985）が提唱したアウトプット仮説等により、アウトプットの役割にも着目されるようになった。Swainによると、学習者がアウトプットを通して「気づき（noticing）」を得ることで、自らの言語的な知識の限界を認識し、より精緻な言語処理が可能になる。これは、インプットだけでは得られにくい内在化（internalization）を促進し、言語運用能力の発達に寄与するものである。

この理論的立場を実証的に裏づけたものとして、Izumi（2002）の研究が挙げられる。この研究では、英語を学ぶ日本人大学生を対象に、インプット中心のグループとアウトプットを組み合わせたグループを比較し、その結果、後者が文法項目の習得において優れた成果を示した。特に、学習者がアウトプットを行う中でエラーを自覚し、それを修正しようとするプロセスが、深い処理と再構築を促し、読解力の向上に寄与していることが示唆された。

また、白井（2012）は、第二言語習得研究における複数の理論を整理したうえで、インプットとアウトプットの間を「双方向的」かつ「補完的」と位置づけた。特に読解においては、十分なインプットが前提となる一方で、その理解を表出するプロセス（アウトプット）を経ることで、内容理解が明確になり、言語的な気づきや意味の再構築が生じると論じている。例えば、読んだ内容を要約したり、再話したりするアウトプット活動によって、学習者はテキストの構造や主題、文脈的含意に注意を向けるようになり、それが再度のインプット処理の精緻化にもつながる。

このように、インプットとアウトプットは相互に影響を与え合いながら、

読解力の発達を支える要素となる。特にリーディングの指導においては、単に大量のインプットを与えるだけでなく、それをもとにしたアウトプット活動を適切に導入することで、学習者の理解を明確化し、語彙や構文への注意を促進することが可能であるとされる。

2.2 音読によるリーディングの質の向上を促すメカニズム

第二言語としての英語 (English as a second language: ESL) 学習者の読解力向上には、メタ認知的認識が重要な役割を果たすことがこれまでの研究で示されており、特に初級～中級レベルの学習者に効果的であるとされている。メタ認知的な意識の向上とリーディングの流暢さに関する研究として、Carrell et al. (1989) が挙げられる。メタ認知的ストラテジーのトレーニングが ESL リーディングを向上させることを実証しており、さらに、Carrell (1989; 1992) は、リーディング中に文構造や語彙に意識を向けることが理解力の促進に有効であると述べている。具体的には、音読を行うことで、学習者は文法や語彙の使用に注意を向け、これがリーディングの理解度を向上させるのである。つまり音読が学習者のメタ認知的な意識の向上を促し、それがリーディングの理解を深めるというメカニズムが示唆されている。

また、外国語としての英語 (English as a foreign language: EFL) 学習者にとって、英語の構造や表現を音声で確認することは、言語の形式や使い方についての気づきが得られる有効な方法であるが、こうした効果は多様な背景の EFL 学習者にも認められている。たとえば、イランの EFL 学習者を対象とした Fazilatfar & Behbahani (2016) の研究では、音読が読解力向上に有効であることが報告されている。さらに、Shinozuka, et al. (2014; 2017) は、日本人大学生を対象に、音読を中心とした一連の活動の効果を検証した。これは、インプットの強化 (スラッシュ・チャンク読み、

クローズテスト）とアウトプット（音読・書き写し）を組み合わせた教授法である。3 か月間の実践の結果、TOEIC Bridge® の成績は有意に向上し、特に学習ストラテジーの使用に変化が見られたことから、音読を含む統合的なアウトプット活動がリーディングスキルの定着に貢献する可能性が示唆された。これらの研究から、音読は単なる発声練習にとどまらず、言語形式への注意喚起、メタ認知の活性化、そしてリーディング理解の精緻化を促す有効な手段であることが示されている。

2.3 リテリング活動と読解力への影響

本研究の中心的関心であるリテリングは、読んだ内容を自分の言葉で語り直すアウトプット活動であり、読解力の育成と評価の両面において注目されている。リテリングは、単なる記憶の再現ではなく、内容の再構成・要約・言い換えなどの認知的操作を伴うため、深い理解と表現の統合が求められる。例えば、Hagaman & Reid (2008) は、物語のリテリング活動が、学習者の談話構造の理解や要約能力の向上に寄与することを報告している。また、近年の研究では、リテリングが読解力および読書の流暢さ (fluency) に及ぼす影響について定量的、または質的な側面から検討を進めており、読解力を高めるための効果的なアウトプット活動として多くの研究で実証されている。一例として、小学生を対象にリテリングを用いてトレーニングを行った Wilson, Gambrell, & Pfeiffer (1985) が挙げられる。即時および一定の時間をおいて行った自由回想や、テキストに明示的に示されている内容を問う質問や推論を要する質問への回答で、リテリング群が有意に優れた結果を示したことから、リテリングがテキスト内容の理解と記憶の深化に寄与することを示した。この研究は、リテリング活動が単なる記憶の助けではなく、学習者が読んだ内容を組織化し意味づけするための生成的な学習戦略であることを強調している。Cao & Kim (2020) の

メタアナリシスでは、1年生から12年生までを対象とした23の研究を統合し、リテリングとその他の読解測定（例：選択肢形式やクローズテスト）との間に中程度の相関があることを示した（ $r = .46$ ）。さらに、ヒントとなるような指示の数が多いほど学習者のリテリングを促進し、その結果、読解力との関連が強くなる。すなわち、リテリングの実施方法の設計が読解評価や教育効果において重要であることが示唆された。

教育実践の観点からは、Hansen（2004）が提唱する発達のリテリング指導が挙げられる。この研究では、学年ごとに発達に応じたりテリング戦略を体系的に提示し、特に小学校低学年においては、物語構造の理解、語彙の定着、読解モニタリングの能力を育成するために再話が有効であることを強調している。さらに、Kodan（2024）の小学生を対象とした定量的研究では、読書の流暢さ、読解力、リテリングスキルの間に有意な正の相関が見られ、リテリング活動が読解指導の中で有効な評価・教育手段となる可能性が実証的に示された。特に、音読とリテリングの記録を用いた評価は、学習者の理解度と表現力の両方を把握できる点で教育的価値が高い。

このように、リテリングは単なる評価手段にとどまらず、理解を深める教育的活動としての意義が高く、リーディングによるインプットをアウトプットによって強化する中核的手法として位置づけられる。

以上のことから、音読およびリテリングのようなアウトプット活動は、学習者の気づきを促し、それによりインプットの質を高める役割を果たすことが示唆されている。特にリテリングは学習者が読んだ内容を再構成し、他者に伝えるプロセスを通じて、テキストの構造・意味・言語形式への注意を促し、精緻なインプット処理を実現する重要な活動である。その活動に対する学習者の認識は、リーディングにおける理解、プロセス、そして知識の定着にどのような変化をもたらすのかを考察する上で、重要な手がかりとなる。本研究では、こうした観点から、英語多読指導においてリテ

リテリング活動が学習者の気づきとインプットの質に与える影響の探究

リング活動が学習者の読みに対する姿勢や、意識、理解に与える影響に注目し、以下の問いを設定する：

1. 学習者は、リテリング活動を通して、どのような気づきを得たのか。
2. その気づきは、その後の読解にどのような影響を及ぼしたのか。

3. 調査方法

本節では、データ収集の概要、調査対象者、実施方法、および本研究で分析対象としたデータについて説明する。

3.1 データ

2023 年度秋学期（10 月～3 月）に、著者の一人が担当した英語科目においてデータを収集した。調査対象となったのは、人文科学系学部、特に、語学に関心が高く外国語能力の向上を希望する学生が比較的多い学部の 2 年次生である。対象の授業は、必修科目「中級英語」として開講されているものだが、「中級」という名称はカリキュラム上の位置づけを示すものであり、受講生の英語力を示しているものではない。当該クラスには、韓国語や中国語といった他の言語にも高い関心を持つ学生が多く²⁾、英語に対して苦手意識を持っている学生も一部含まれていると考えられる。履修者数は 15 名である。

本科目は、流暢かつ正確に「読む」力を伸ばすことを目標としており、多様な話題に触れる中で、様々な活動やタスクを通じて、英語の語彙、表現、文法、構造を学ぶことを目的としている。さらに、これらの知識の処理を自動化させることにより運用能力を高め、英文読解力の向上を図ることを目指している。その一環として、多読を授業内外の活動として取り入れた。授業外では、学期中、継続して多読本を読み、その読了数を記録する

ことを課題とし、授業内では10分程度の黙読（Sustained Silent Reading: SSR）の時間を設けた。SSRの後には、読んだ内容に基づくリテリング活動を行った。本研究では、このリテリング活動の後に実施したアンケートの自由記述回答を主なデータとして用いる。

3.2 リテリング活動

リテリングの活動は以下のような手順で実施した。教材として、多読本のシリーズのひとつである Foundations Reading Library（FRL）のレベル1および2を使用した。まず教員が多読本を30冊程度持参し、教室の空きスペースに並べた。受講生はそこから、読みたいと思うものを選び、6～7分程度で黙読を行った。場合によっては、ペアで同じ本、または異なる本を読むよう教員が指示することもあった。読書時間は、受講生の様子に応じて、短縮あるいは延長することもあった。

次に、教員の指示でペアを組み、各受講生が読んだ本の内容を相手に英語で伝える活動を行った。リテリングを始める前に、内容理解の確認などのタスクを取り入れたこともあった。リテリングの持ち時間は、受講生の習熟度など、さまざまな要素を考慮し、1分30秒から2分程度とした。なお、ペアのやり取りが活発で、会話が弾んでいる様子が見られた場合には、時間を延長することもあった。教室前方に設置された大型スクリーンにストップウォッチを表示することで、受講生が時間を意識しながら話すことができるようにした。

活動中は、受講生の習熟度やその時々が発話の様子に応じて、教員が支援を行った。たとえば、役立ちそうな表現や補助となる情報を板書したり、話者交代の際にクラス全体に向けて助言をしたりした。また、机間巡視を通して、受講生が表現に詰まる場面では、教員が適切な語句や言い回しを提示したりすることもあった。話し相手を変えて繰り返し練習を行うこと

リテリング活動が学習者の気づきとインプットの質に与える影響の探究

もあり、これは活動の目的や授業の進行状況に応じて実施した。そして、最後にフォームを用いたアンケートに回答してもらった。

3.3 アンケート

リテリング活動およびアンケートは全6回実施した。実施日と回答者数は表1のとおりである。各回の参加者数には変動が見られるが、これは出席した受講生のみがアンケートに回答したからである。特に第6回目は学期末に近く、もともと欠席しがちだった受講生が継続して欠席するようになったこともあり、回答者数は最も少なかった。上述のように、英語に苦手意識をもつ受講生が含まれていたことも、このような出席状況の一因であると考えられる。

表2はアンケートの設問の一覧である。横軸に実施回(1回目～6回目)、縦軸に設問項目を示している。表からわかるように「リテリング活動についての感想」と「本の内容の説明」を除き、設問の内容は各回で異なっている。本稿では、網掛けされた項目（リテリング活動についての感想、初回のリテリング活動からの変化、リテリング活動中に意識したこと、読書中に意識したこと、リテリング活動で身についた力、リテリング力の向上に必要なこと、感想）に対する回答に焦点をあて、分析と考察を行う。

4. データ分析・結果

表1 アンケート実施日と回答者数

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
実施日	23/09/26	23/10/17	23/11/07	23/11/28	23/12/19	24/01/16
回答者数	13	13	12	11	12	8

表2 設問項目と実施回

設問項目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目
1. 学籍番号	●	●	●	●	●	●
2. 名前	●	●	●	●	●	●
3. 本のタイトル	●	●	●	●	●	●
4. 今日のリテリング活動について、感想を書いて下さい。	●	●	●	●	●	●
5. 本の内容を英語で書いて下さい。リテリング練習で話した内容を思い出して、できるだけ多く書いて下さい。	●	●	●	●	●	●
6. 前回のリテリング活動と変わったところがありますか。どのように変わりましたか。詳しく書いて下さい。		●				
7. 今日はどうなことを意識して練習しましたか。			●	●	●	●
8. 本を読むときに意識したことはありますか。どのようなことを意識して読みましたか。			●	●	●	●
9. 読むのにかかった時間					●	●
10. これまでのリテリングの活動でどのような力がついたと思いますか。						●
11. ほかにどのような練習をすれば、もっとリテリング（読んだ内容を英語でまとめる）の力がつくと思いますか。						●
12. これまでのリテリングの活動で感じたことがあれば、自由に書いて下さい。						●

本節では、リテリング活動後に実施したアンケートの自由記述回答を分析し、その結果を示す。分析にはテキストマイニングソフト（KH Coder）を使用し、各設問の回答で受講生が使用した語のうち、頻度の高い語（以下、頻出語）を抽出した。続いて、それらの語の出現文脈を踏まえて主題分析を行い、リテリング活動に対する受講生の捉え方や意識の変化、学習の焦点などを探った。文脈を確認するための KWIC（Key Words In Context）コンコーダンス出力の一例を資料1に、主題分析プロセスの一例を資料2に示す。以下に、設問ごとに抽出された頻出語をもとに結果を示す。

4.1 リテリング活動についての感想

表3は、設問4「今日のリテリング活動について、感想を書いて下さい」に対する回答から抽出された頻出語を示している。この設問は、6回すべてのアンケートに共通して設けられたものであり、受講生はその日のリテリング活動を振り返って自由に感想を記入した。回答は全89文、71段落から構成され、抽出された総語数は1,715語、異なり語数は326語であった。

頻出語には、「説明（24回）」「難しい（23回）」「読む（21回）」「内容（18回）」「話す（15回）」などが挙げられ、説明（話すこと）の難しさや、読んで理解することに比べて話すことの難しさが語られていることがうかがえる。これに続き、「英語（11回）」「時間（10回）」「理解（10回）」など、リテリング活動における言語的・認知的負荷に関連する語が多く出現している。また、「簡単」「自分」「少し」「前回」「上がる」「表現」「言葉」といった語も複数回出現しており、自己評価や前回との比較、使用言語の選択に関する意識もうかがえる。

表3 設問4「今日のリテリング活動について、感想を書いて下さい」(第1回～第6回)の回答における頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
説明	24	一度	2	詰まる	1
難しい	23	英文	2	久しぶり	1
読む	21	何故か	2	教える	1
内容	18	回数	2	驚く	1
話す	15	共有	2	苦戦	1
思う	13	教科書	2	結末	1
本	13	緊張	2	言語	1
英語	11	見る	2	戸惑う	1
時間	10	工夫	2	考える	1
理解	10	今	2	行き方	1
感じる	8	最後	2	今回	1
簡単	8	重要	2	混じる	1
自分	8	初めて	2	昨年	1
前	8	上手	2	仕方	1
少し	7	想像	2	使う	1
前回	7	早い	2	思わず	1
単語	7	増やす	2	字	1
上がる	6	多い	2	次	1
表現	6	端的	2	自動	1
言葉	5	喋る	2	実感	1
今日	5	長々	2	主人公	1
出来る	5	翻訳	2	手間取る	1
詳しい	5	良い	2	授業	1
上手い	5	力	2	終わる	1
相手	5	話せる	2	重ねる	1
日本語	5	びっくり	1	初め	1
分かる	5	オーバー	1	少ない	1
話	5	キーワード	1	焦る	1
リテリング	4	シンプル	1	笑	1
言う	4	ジャンル	1	上達	1
言える	4	スムーズ	1	場面	1
出る	4	バツ	1	伸ばす	1
人	4	越す	1	新鮮	1
伝える	4	音楽	1	真似る	1
読める	4	下手	1	身	1
スピード	3	会話	1	人物	1
スラスラ	3	解ける	1	整理	1
レベル	3	回	1	接続詞	1
意識	3	悔しい	1	絶対	1
違う	3	改めて	1	先	1
覚える	3	学ぶ	1	先生	1
語彙	3	学校	1	鮮明	1
行く	3	楽	1	全然	1
最初	3	楽しい	1	素早い	1
短い	3	活動	1	即興	1
伝わる	3	感想	1	足りる	1
比べる	3	慣れる	1	続ける	1
もう少し	2	簡潔	1	多読	1
メモ	2	頑張る	1	大事	1
以前	2	嬉しい	1	知る	1

4.2 初回のリテリング活動からの変化（2回目）

第2回のアンケートでは、設問6「前回のリテリング活動と変わったところがありますか。どのように変わりましたか。詳しく書いて下さい」という設問を設けた。第1回目の活動はコースの導入回に実施されたものであり、多くの受講生にとっては初めて体験する形式の活動であったと考えられる。実施時には戸惑いや困難な様子が見られたものの、意欲的に取り組む姿勢が確認された。例年、リテリング活動に対しては、受講生から肯定的な反応やコメントが寄せられており、活動を通じて手応えを感じている様子がうかがえる。こうした傾向を踏まえて、第2回以降には活動への予測や心構えの面で、初回とは異なる受け止め方が生まれると考えられる。そこで2回目では、受講生が活動内容のある程度見通せるようになった段階で、初回の経験を踏まえ、自身の変化をどのように自覚しているのかを把握することを目的として、本設問を設定した。

本設問には13名が回答し、全体で16文、13段落のデータが得られた。抽出された語数は総計361語、異なり語数は115語であった。

表4に示すように、出現頻度の高い語には、「説明(8回)」「前回(6回)」「読む(5回)」「内容(5回)」「本(5回)」などが見られ、リテリング活動そのものに関する描写が多いと思われる。これらの回答からは、受講生が設問に誠実に向き合い、自身の経験や変化を丁寧に振り返っている様子がうかがえる。また、リテリング活動の過程をしっかりと意識して取り組んでいる姿勢も読み取れる。「自分(4回)」「言葉(3回)」「今回(3回)」「思う(3回)」「早い(3回)³⁾」といった語の出現は、初回との比較を通して自らの変化を評価しようとする姿勢を示している。

興味深い点として、「スムーズ」「スラスラ」「話せる」といった語の出現が挙げられる。これらは、語りのテンポや流暢さに対する受講生の意識、あるいはそうしたものを重要なものとして認識していることを示している

表4 設問6「前回のリテリング活動と変わったところがありますか。どのように変わりましたか。詳しく書いて下さい」(第2回)の回答における頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
説明	8	文	2	使う	1
前回	6	変わる	2	時間	1
読む	5	理解	2	初めて	1
内容	5	いつ	1	深い	1
本	5	お互い	1	先生	1
自分	4	スムーズ	1	前	1
言葉	3	スラスラ	1	全部	1
今回	3	以前	1	早め	1
思う	3	意識	1	増す	1
早い	3	感じる	1	端的	1
ベース	2	気持ち	1	知る	1
言う	2	教える	1	読解	1
言える	2	仰る	1	物語	1
出来る	2	繋ぎ	1	文章	1
書く	2	繋げる	1	無理矢理	1
少し	2	呼ぶ	1	要点	1
上手い	2	考え	1	流れ	1
単語	2	考える	1	話せる	1
伝える	2	最初	1		

と考えられる。

4.3 リテリング活動中に意識したこと

第3回から第6回のアンケートでは、受講生の意識とその変化を確認することを目的として、練習中に意識したことについて回答を求めた(設問7)。この設問に対する総抽出語は746語、異なり語数は185語であり、44文、43段落のデータが得られた。

表5は頻出語の一覧であり、「意識(23回)」「説明(10回)」「単語(10回)」「読む(9回)」が最も多く出現している。これらの語は、受講生がどのように活動に取り組んだかを反映しており、特に語彙や表現、読むこと、すなわち理解度の向上に焦点をあてたことを示唆している。また、「早い(6回)」「スピード(3回)」「時間(3回)」といった語の出現から、スピードや時間管理を意識したことが読み取れる。

さらに興味深い点としては、「簡潔(4回)」「区切り(2回)」「端的(2回)」

リテリング活動が学習者の気づきとインプットの質に与える影響の探究

表5 設問7「今日はどうなことを意識して練習しましたか」(第3回～第6回)の回答における頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
意識	23	次	2	止まる	1
説明	10	書く	2	出る	1
単語	10	省く	2	上手	1
読む	9	心がける	2	進む	1
文	7	速い	2	人	1
早い	6	端的	2	前回	1
伝わる	6	伝える	2	前置詞	1
理解	6	部分	2	続ける	1
使う	5	分かる	2	多い	1
簡潔	4	And	1	多少	1
読める	4	he	1	大まか	1
物語	4	John	1	大切	1
話す	4	Then	1	大体	1
スピード	3	なんか	1	丁寧	1
時間	3	もう一度	1	喋る	1
自分	3	もう少し	1	直後	1
重要	3	キーワード	1	途中	1
出来る	3	パッ	1	洞窟	1
正確	3	メモ	1	読み直す	1
相手	3	一度	1	難しい	1
知る	3	英文	1	日本語	1
長い	3	音楽	1	抜ける	1
内容	3	解く	1	分ける	1
本	3	絵	1	文章	1
練習	3	覚える	1	壁画	1
話	3	簡単	1	黙る	1
ガラガラ	2	間に合う	1	問題	1
意味	2	教える	1	訳す	1
箇所	2	区切る	1	訳せる	1
簡潔	2	工夫	1	予想	1
区切り	2	行	1	要約	1
見る	2	今	1	流れ	1
言える	2	作れる	1	連想	1
思う	2	参考	1		

「伝える (2回)」といった語の出現である。表現の簡潔さやわかりやすさを重視した言及が見られ、語りや説明の際に、冗長を避けるようにして要点を捉え、的確に伝えることを意識していることが読み取れる。

4.4 読書中に意識したこと

リテリング活動においては、理解や要約の工夫に加え、スピードや表現の簡潔さへの意識が見られた。これらが読書にどのように影響していたのかを検討するために、本節では読書中の意識に関する回答を分析する。

表6は、設問8「本を読むときに意識したことはありますか。どのようなことを意識して読みましたか」という設問に対する回答の頻出語の一覧

表6 設問8「本を読むときに意識したことはありますか。どのようなことを意識して読みましたか」(第3回～第6回)の回答における頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
読む	39	掴む	2	早める	1
意識	21	分かる	2	相手	1
理解	14	しづ	1	増やす	1
早い	12	セリフ	1	多い	1
内容	5	ダラダラ	1	大	1
物語	5	ピックアップ	1	大まか	1
スピード	4	何時も	1	大事	1
前	4	箇所	1	大切	1
読める	4	簡潔	1	大体	1
部分	4	区別	1	探す	1
英語	3	系列	1	注目	1
説明	3	繋ぎ	1	喋る	1
単語	3	結果	1	通す	1
読み返す	3	言える	1	伝える	1
日本語	3	行う	1	登場	1
訳	3	最後	1	頭	1
訳す	3	細かい	1	動詞	1
流れ	3	使う	1	特に	1
キーワード	2	止まる	1	読み取る	1
スラスラ	2	時	1	漠然と	1
ポイント	2	次	1	発表	1
一つ一つ	2	主人公	1	分ける	1
一文	2	取る	1	文	1
見る	2	取れる	1	文字	1
言葉	2	集中	1	変換	1
後で	2	重点的	1	本	1
考える	2	順に	1	翻訳	1
思う	2	少し	1	訳せる	1
重要	2	詳細	1	要点	1
出来る	2	状況	1	流す	1
正確	2	心がける	1	話	1
素早い	2	人物	1	舐める	1
速い	2	先	1		
丁寧	2	前後	1		

である。総抽出語は 717 語、異なり語数は 189 語、45 文、43 段落のデータである。

設問で「読むときの意識」を尋ねていることもあり、「読む (39 回)」「意識 (21 回)」が最頻出語となっている。次に「理解 (14 回)」が多く出現していることから、受講生は読書活動において内容理解に重点を置いていたことがわかる。「読み返す (3 回)」「日本語 (3 回)」「訳 (3 回)」「訳す (3 回)」といった語句からは、英文の意味を正確に把握しようとする姿勢や、必要に応じて読み返しをしていた様子がうかがえる。「物語 (5 回)」「流れ (3 回)」「キーワード (2 回)」「ポイント (2 回)」「重要 (2 回)」といった語も見られ、内容の展開や物語の構造へ意識を向けていたことも読み取れる。

また、「早い (12 回)」「スピード (4 回)」「素早い (2 回)」「速い (2 回)」といった語句からは、リテリング時と同様に、情報処理の速度や読むスピードを意識していたことが示唆される。

4.5 リテリング活動について

第 6 回のアンケートでは、リテリング活動全体に関する受講生の捉え方を把握するために、以下の 3 つの設問を追加した。設問 10「これまでのリテリングの活動でどのような力がついたと思いますか」、設問 11「ほかにどのような練習をすれば、もっとリテリング（読んだ内容を英語でまとめる）の力がつくと思いますか」、設問 12「これまでのリテリングの活動で感じたことがあれば、自由に書いて下さい」の 3 問である。

表 7 は、設問 10「これまでのリテリングの活動でどのような力がついたと思いますか」という設問への自由記述の一覧である。すべての回答が「読む力」と「伝える力」のいずれか、あるいは両方に関係していた。リテリングは一般的に、読んだ内容を自分の言葉で要約し伝えるという性質から、アウトプット、特にスピーキング能力の育成に焦点を当てた活動と捉えら

表7 設問10「これまでのリテリングの活動でどのような力がついたと思いますか」への回答一覧⁴⁾

- ・内容を理解しながら早く読む力、長い文を簡単にまとめて相手に伝える力
- ・読みとく能力がついたと思う。
- ・長文の読み方と速さ、内容理解がしっかりできる
- ・人に説明する力。英語力はそんなに上達しませんでした。人にどうすれば上手く伝わるか、どれだけ簡単な単語を使って相手に説明するかなどを人の話を聞いたりして少しでも身につけたと思いました
- ・読解力がついたと思います。
- ・人に伝える力
- ・読むスピードと読みながら内容を理解する力。
- ・何でもいから英語で伝えようと言う力になった。

れがちである。しかし、それに加えて「読む力」が向上したとを感じる受講生が多く見られた点が注目される。特に興味深いのは、テキスト内容の深い理解を意味する読解力の向上だけでなく、読解にかかるスピードの向上にも言及していることである。リテリングという一見アウトプット中心の活動が、受容的スキルである読みの発達にも寄与していることが、学習者の実感を通じて示唆される。

リテリングの力をつけるために必要だと考える学習法を聞いた設問に対する自由記述の回答一覧を表8に示す。まず、「もっと人と英語で話す」「何回も説明する」のように、説明や話すことの反復練習やその量の増加の必要性に関する言及が見られる。これはリテリングという活動の性質上、内容を伝える練習を積むことが不可欠であるという学習者の実感が反映されていると言える。

次に、「単語を覚える」「熟語や表現を増やす」といった語彙力の強化に関する記述も同様に複数見られる。リテリングの際に使える単語や表現の幅を広げる必要があるという気づきを得た学習者が一定数いたことがうかがえる。

さらに、これらの気づきが「読む冊数を増やす」「多読や長文読解を多

リテリング活動が学習者の気づきとインプットの質に与える影響の探究

表8 設問11「ほかにどのような練習をすれば、もっとリテリング（読んだ内容を英語でまとめる）の力がつくと思いますか」への回答一覧

- ・単語を先ずは覚える。そして、もっと人と英語で話すこと
- ・単語の知識を増やすこと、表現を覚えることだと思う。
- ・多読はもちろん、長文読解を多くこなすこと。
- ・何回も何回も説明して、相手に説明された文章も参考にすべき。数を沢山こなすしかないと思います！
- ・もっとリテリングの力をつけるには、数多くの単語や熟語を勉強することが大事だと思います。
- ・簡単でいいから単語を早く思いつく
- ・読む冊数を増やす。
- ・読んだ本を読み返すことなく自分で英語でまとめる練習をする。

くこなす」といったインプット量の増加への関心につながっていることが注目に値する。すなわち、語彙力を充実させるためには豊富な読書が欠かせないという認識が高まり、その結果、より深い理解や質の高いインプットが促されるのではないだろうか。

表9は、設問12「これまでのリテリングの活動で感じたことがあれば、自由に書いて下さい」という設問に対する自由記述回答の一覧である。まず、「理解していてもそれを相手に伝える英語力がまだまだできていない」「自分がまとめた日本語を英語で表現するのが難しかった」「人に説明するのはとても難しい」といった、自分の理解を他者に伝えることの難しさを挙げる回答が複数見られた。また、「文法もデタラメだったり単語が出てこなかったり自分の英語力を再確認することができた」といった記述からは、自分の英語運用能力の課題を実感した様子が見えらる。

興味深いのは、「読み」に意識が向いている回答が見られた点である。「英語を速く読んで理解する力がついたと思う」「読むにつれてスピードが速くなったと思った」といった記述は、読解の処理速度の向上を実感していることを示している。また、「たくさんの多読ができて楽しかった」という回答からは、一見アウトプット活動のように思われがちなりテリングの

表9 設問12「これまでのリテリングの活動で感じたことがあれば、自由に書いて下さい」への回答一覧

- ・本当に英語を早く読んで理解する力がついたと思う。ただ、自分の中で理解していてもそれを相手に伝える英語力がまだまだできていないので、そこが課題かなと思う。
- ・自分がまとめた日本語を英語で表現するのが難しかった。相手に伝えるのが難しかった。
- ・リテリング活動で友達と本の内容を話し合うのがとても楽しかった。
- ・人に説明するのはとても難しいけれど、説明する能力は少しは身についたと思うのでよかった。
- ・リテリングの活動は、英語を駆使するためには欠かせないものだと感じました。
- ・たくさんの多読ができて楽しかった
- ・読むにつれてスピードが早くなったと思った
- ・自分の言葉で読んだ本の紹介をしないとイケないのは大変で文法もデタラメだったり、単語が出てこなかったり自分の英語力を再確認することができたと思いました。
- ・また、以外に（ママ）簡単な単語を使って何かを説明することが出来るのだと実感しました。

活動においても、「読み」へ意識が向けられていたことを示している。

さらに、「自分の中で理解していても、それを相手に伝える」のが難しいといった回答に見られるように、理解と説明のあいだにある「ギャップ」への気づきが、読解そのものへの関心を高めている様子も読み取れる。自分の理解を言葉にしようとする中で、読んだ内容の把握の程度や曖昧さに気づき、それが読みの深さや精度への意識につながっていると考えられる。

5. 考察

本研究では、多読指導の一環として取り入れたリテリング活動が、学習者にどのような気づきをもたらすのか、さらにその気づきが読解にどのような影響を及ぼすのかを検討することを目的とした。本節では、アンケートへの回答から得られたデータに基づき、2つのリサーチクエスションに関する考察を行う。

第一のリサーチクエスション「学習者は、リテリング活動を通して、どのような気づきを得たのか」に関して、まず、アンケートへの回答で最も多く見られたのは「自分の言葉で説明することの難しさ」に関する記述で

ある。これは、単にスピーキングスキルの不足を指摘するだけでなく、読んだ内容を理解することと、説明することの間に存在するギャップに学習者が気づいたことを意味している。例えば「本の内容は理解できるが英語でそれを説明するのが難しい」といった回答からは、読解（インプット）とリテリング（アウトプット）との間にある乖離を認識していることが示唆される。学習者はリテリングという行為を通じて、自身の理解が曖昧な部分や、説明の際に必要な要素に対する意識を高めていたことがわかる。回答には「物語の流れ」や「要点」を意識したことに言及したものが複数見られたことから、学習者が情報の取捨選択や物語の構造を意識するようになったことがうかがえる。さらに、語彙に関する気づきも多くの回答に見られた。リテリングというアウトプットの機会が、学習者に語彙の限界を認識させる役割を果たしていたと考えられる。

第二のリサーチクエスション、リテリング活動を通して得た「その気づきは、その後の読解にどのような影響を及ぼしたのか」に関しては、興味深い点が数点挙げられる。まず、多くの学習者が「スピードを意識して、素早く読みながらも、内容をしっかりと理解する」ことへの意識の高まりを述べている。例えば、「なるべく速く読みつつも、しっかりと内容を理解すること」といった記述である。リーディングの後に控えている聞き手への説明をするためには、内容を正確に理解する必要がある。そして正確に理解することを意識しながら、より流暢な読みの能力をつけることも意識しているのである。このような意識は、リテリング活動を通して内容を人に伝えるという経験したことにより、単なる黙読では意識されにくい精緻な理解の必要性が実感されたためだと考えられる。

正確さに関連して、興味深い回答として「前置詞が抜けないようにした」というものがあつた。自分自身の発話を前提にした読みを通して、より精密な言語構造への意識が働くようになったことがうかがえる。「動詞に注

目して読んだ」といった回答も関連していると考えられる。特に、多読本では挿絵などの視覚情報によって物語の内容を「なんとなく」理解できることもあるため、必ずしも英語の言語情報が丁寧に処理されているとは限らない。もちろん、挿絵などの非言語的な情報を理解の補助として用いることが悪いわけではない。また、英語への心理的なハードルを下げたり、「読める」といった達成感や楽しさを通してモチベーションを高めたりすることを目的とした多読学習の場合には、視覚情報の利用も有効な戦略である。しかし、本研究の対象は「英語運用力を高める」ことを目指したコースの受講生であり、そのような学習者にとっては、書かれた言語情報を丁寧に処理することが必要不可欠である。実際の指導場面で「書かれた英文をしっかり読むように」と指示をしても、それが実践されるとは限らない。また学習者の言語処理のプロセスを常にモニターすることも容易ではない。そこで、本研究のようにリテリング活動を取り入れることによって、学習者が自らの発話経験から、気づきを得て、文構造や語の選択といった言語的側面により注意を払うように導くことができる。リテリング活動が精密な言語処理を促進する一つの有効な手段となり得ることを示している。

さらにリテリングを通して、学習者は単語や文のレベルにとどまらず、より広い談話レベルでの気づきを得ていた。例えば、物語の流れや、物語の構造へ言及した回答に見られるように、リテリングで相手に伝わるように、また自分自身が伝えやすいように、情報の展開や場面の移り変わりに注意をして読むようになった。リテリング活動が、談話レベルでの理解を促していることが考えられる。また、「John を使ったらその直後の文は he を使うようにした」といった回答からは、照応関係への気づきが見て取れる。このような代名詞の使用に関する注意は、読解の際には必ずしも明示的に意識されとは限らないが、文脈のつながりを理解したり、明確にしようとしたりするときには、避けて通れないものである。リテリングを通

リテリング活動が学習者の気づきとインプットの質に与える影響の探究

して、学習者は単語の意味だけでなく、指示語や代名詞が何を指しているのかという意味上のつながりに注意を払うようになっていた。

加えて、「スピードを意識しながら、内容を区切りごとに理解出来るようにした」といった回答からは、文や文章の意味処理において、何らかの言語処理方略を用いるようになったことがうかがえる。これは、単に速く読むことを目的としたスキミング的な読みとは異なり、言語情報を丁寧に処理していることを示している。リテリングというアウトプットの存在を前提とする読みの中で、学習者は言語情報を読み飛ばすことなく処理をし、意味理解に結びつけようとする姿勢を持つようになったと考えられる。リテリングは読解後のアウトプット活動として、学習者の気づきを引き出す契機となり、読みの過程そのものを省察し、それを意識化することで実践することを可能にした。

最後に、いくつかの回答で言及されていたように、多読本の文章中で使われていない語彙でまとめようとしたり、自分の言葉で説明を試みたり、端的に伝えようとしていた点について指摘しておきたい。これは、読んだ内容を、要約や言い換えといった操作を通して再構成し表象を構築するプロセスであり、読解過程の一部として重要である。リテリング活動を行うことによって、こうしたプロセスの必要性が学習者自身に認識されていたと考えられる。このことから、リテリングは読みのプロセスの各段階（各要素）を支え、より深い理解に寄与していたことがうかがえる。

おわりに

本研究では、大学の多読指導の一部として取り入れられたリテリング活動が、学習者のどのような気づきや変容を促したのかについて、自由記述式アンケートへの回答分析を通して検討した。その結果、学習者は物語の再構築を通じて、受容能力と産出能力のギャップに気づき、そこから自身

の理解の程度や英語力を認識するようになるとともに、語彙や表現への意識を高めていたことが示唆された。

こうした結果は、アウトプット活動が「話す力をつけるために話す」といった表面的で形式的な練習の場ではなく、学習者の内的な言語処理プロセスへの内省を促進し、インプットの質的向上にも寄与する可能性を示唆している。英語学習においては、「話す力をつけるには話す練習が必要である」といった単純化された言説のもとでアウトプットの重要性が強調されがちである。しかし、まず十分なインプットの量とその質を確保することが、言語習得には不可欠である。リテリング活動は、読書を通じたインプットをもとに、学習者自身が物語を再構築するというプロセスを経ることによって、深い意味処理を促し、実際の言語運用に結びつく形で記憶に定着する可能性を持つ。

本研究は一つの授業実践を対象とした調査に基づいており、今後は異なる学習者層での事例の蓄積や、より長期的な観察を通じて、さらに学習者の気づきの変容や、その定着の様子、そして学習成果との関係を探っていくことが可能になるだろう。

注

- 1) 日本語を第一言語とする学習者に加え、日本語以外を第一言語として使用しながらも、教育機関において共通語として日本語を使用している学習者も「外国語としての英語」教育の対象に含まれる。本稿では、学習者の多様性を想定してはいるが、本文中の記述の簡潔さを優先し、これらをまとめて「日本語話者」と表記する。

また、「日本語」という言語分類も本来は社会的に構築された概念であるという認識に立ってはいるが、本稿では煩雑さを避けるため、特定の表記上の区別（たとえば引用符）は用いないこととする。

- 2) 当該大学では、中国語・韓国語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・イ

リテリング活動が学習者の気づきとインプットの質に与える影響の探究

タリア語が「第二外国語」として開講されている。クラスによっては英語に強い関心をもつ学生が多い場合もあるが、本研究の対象クラスでは、必修科目である英語よりも、第二外国語として履修しているこれらの言語に強い関心を持つ学生が多い傾向が見られた。

- 3) 回答に使用された語句は、変換ミスや誤用と思われる場合も含め、原文のまま分析や引用をしている。文脈上、「速い」とすべき箇所が「早い」と記入されていると考えられる。データ例：「どれだけ早く英文を日本語に訳せるかを意識した」「なるべく早く読みつつも、しっかり内容を理解すること」
- 4) 自由記述は、基本的に受講生の表現を尊重し、誤字や漢字の変換ミス、句読点の使用を含めて原文のまま掲載している。本文中で取り上げる際には、できる限り原文のニュアンスを保つために、基本的にはそのまま引用するようにしたが、一部表記を調整している。以下同様。

先行研究

- Cao, Y., & Kim, Y. S. G. (2021). Is retell a valid measure of reading comprehension? *Educational Research Review*, 32, 100375.
- Carrell, P. L. (1989). Metacognitive awareness and second language reading. *The Modern Language Journal*, 73 (2), 121-134. <https://doi.org/10.1111/j.1540-4781.1989.tb02534.x>
- Carrell, P. L. (1992). Awareness of text structure: Effects on recall. *Language Learning*, 42 (1), 1-18. <https://doi.org/10.1111/j.1467-1770.1992.tb00698.x>
- Carrell, P. L., Pharis, B. G., & Liberto, J. C. (1989). Metacognitive strategy training for ESL reading. *TESOL Quarterly*, 23 (4), 647-678. <https://doi.org/10.2307/3587536>
- Fazilatfar, A. M., & Behbahani, H. K. (2016). The effect of read-aloud method on Iranian EFL learners' reading comprehension. *The Journal of Applied Linguistics and Applied Literature: Dynamics and Advances*, 4 (2), 81-100. <https://doi.org/10.22049/jalda.2018.26255.1070>
- Hangman, J. L., and Reid, R. (2008). The effects of the paraphrasing strategy

- on the reading comprehension of middle school students at risk for failure in reading. *Remedial and Special Education*, 29 (4), 222-234. 10.1177/0741932507311638.
- Hansen, J. (2004). *Tell me a story: Developmentally appropriate retelling strategies*. International Reading Association.
- Izumi, S. (2002). Output, input enhancement, and the noticing hypothesis: An experimental study on ESL relativization. *Studies in Second Language Acquisition*, 24 (4), 541-577. <https://doi.org/10.1017/S0272263102004023>
- Kodan, H. (2024). Examining the reading fluency, reading comprehension, and retelling skills of primary school students. *Ege Eğitim Dergisi*, 25 (3), 198-212. <https://doi.org/10.12984/egeefd.1487290>
- 佐々木啓成. (2020). 『リテリングを活用した英語指導』. 大修館書店.
- Shinozuka, K., Mizusawa, Y., & Shibata, S. (2014). Effectiveness of read-aloud instruction of English for the introductory level Japanese college students. *Media English Education Journal*, 4, 161-179.
- Shinozuka, K., Mizusawa, Y., & Shibata, S. (2017). Effectiveness of read-aloud instruction on motivation and learning strategy among Japanese college EFL students. *English Language Teaching*, 10 (4), 1-14. <http://doi.org/10.5539/elt.v10n4p1>
- 白井恭弘. (2012). 『英語教師のための第二言語習得論入門』. 大修館書店.
- Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp. 235-253). Newbury House.
- Wilson, R. M., Gambrell, L. B., & Pfeiffer, W. R. (1985). The effects of retelling upon reading comprehension and recall of text information. *The Journal of Educational Research*, 78 (4), 335-338. <https://doi.org/10.1080/00220671.1985.10885604>

リテリング活動が学習者の気づきとインプットの質に与える影響の探究

資料

資料1 KWIC (Key Words In Context) コンコーダンスの例

読書中の意識（設問：本を読むときに意識したことはありますか）

[illegible]

資料2 主題分析プロセスの例

読書中の意識（設問：本を読むときに意識したことはありますか）

	自由記述内容	コード
3 回目	・ 繋ぎ言葉を意識した	語彙・表現への注目
	・ 読み終わったあとにどのように説明するかキーワードを意識してよんだ。	語彙・表現への注目
	・ 話の流れを掴もうと意識しながら読んだ。	全体把握・内容把握
	・ 細かく一つ一つ読まずに漠然と流れを掴んで読むようにした。	全体把握・内容把握
	・ できるだけ読んだ部分を日本語に訳して理解するように意識した。	正確に読む姿勢
	・ 簡潔にまとめられるように要点を読みながらまとめました。	全体把握・内容把握
	・ セリフよりも動詞に注目して読んだ。	語彙・表現への注目
	・ 内容を理解することを意識して読みましたが、次はスピードを早くできるように意識して読みたいと思います。	正確に読む姿勢 スピードを意識した読み
	・ 素早くかつ丁寧に訳せることを意識した	スピードを意識した読み 正確に読む姿勢
	・ 理解しながら前よりも早く読めることを意識しました。一回に読む単語数を増やして読むスピードを早めるよう意識しました。	スピードを意識した読み
・ 前みたいにゆっくり少しづつ読むのではなく、スラスラと読むようにした！	スピードを意識した読み	
・ 前から英語を訳すように意識して読みました。	文構造を意識した読み	

Exploring the Impact of Retelling on Learners' Awareness and Input Quality in Extensive Reading Instruction

TSURII Chie
CHUNG Kyungsuk
SAITO Tomoko

This study explores how output activities, particularly retelling following silent reading using graded readers, can facilitate deeper engagement with reading in extensive reading education. Extensive reading can effectively enhance learners' language processing abilities. However, where appropriate materials and proper guidance are not used, skimming may follow, resulting in learners claiming to have read a text without actually engaging in sufficient language processing to develop language processing skills. Where appropriate, activities that promote accurate bottom-up processing and subsequently deeper understanding should be incorporated.

In this study, retelling was introduced as a follow-up activity for silent reading, using graded readers in a university reading course that partially integrated extensive reading practices. This was done to explore how this output task could prompt learners to reflect more attentively on the content of their reading and process linguistic input more deeply. Participants' responses to open-ended reflection questions administered after each of the six retelling sessions were qualitatively analysed to investigate how their awareness of reading and language use changed throughout the course.

The findings suggest that retelling provided learners with the valuable opportunity to become aware of the gap between comprehension and

expression, leading them to reflect in a more conscious manner on their understanding of the texts. Multiple participants reported difficulty explaining the story in their own words, which led them to notice ambiguities in their understanding and to pay closer attention to key elements in the text, including the story's structure, sequencing, and vocabulary. Their awareness went beyond words and sentences to the connections between ideas and references that help make the text coherent.

Moreover, the participants noted that the retelling activity led them to process linguistic input more attentively in reading. Some participants adopted more deliberate reading strategies, seeking to read fluently while attempting to read accurately. In addition, they came to take more care regarding lexical choices and grammatical structures. These findings indicate that retelling can foster more deliberate and attentive reading, helping learners shift from surface-level skimming to deeper comprehension.

〔実践報告〕

日本語教育を学ぶ大学生と日本で働く 外国人との交流会

——日本語教師を目指さない学生に日本語教育課程が提供できること——

大河内 瞳

筆者が所属していた大学では、日本語教師にならないが日本語教師の資格取得を目指す学生が多くいたことから、そういった学生にとっても学びの機会になるだろうと考え、日本で働く外国人との交流会を実施した。本稿では、その交流会の準備から実施、および参加者である外国人へのアンケート結果と学生の振り返りレポートの分析結果を報告する。

1. 実践の出発点

本稿は、大学生と日本で働く外国人が交流する機会として設けた交流会の実践報告である。

筆者は、2020年度から2022年度まで大阪樟蔭女子大学で日本語教師養成課程を担当していた。その間に感じた課題の1つは、日本語教師の資格は取得したいが、日本語教師にはならない学生が多いことである。このような学生が日本語教師養成課程で学ぶ意義は何だろうか。日本語教師養成課程が日本語教師を目指さない学生に提供できることは何であろうか。

キーワード：日本語教師を目指さない学生、日本で働く外国人、日本語教育課程、交流会、学生の学び

この課題は、筆者が所属していた大学に限った状況ではない。文化庁が2019年度に行った調査によると、大学在学中に日本語教師養成課程を修了した学生のうち、日本語教師関連の仕事に就いた者は7.2%に過ぎず、6割近くが一般企業に就職をしているという（文化庁 2020）。つまり、日本語教師にならない学生に対する教育の意義の検討は、多くの日本語教師養成課程に共通した課題であると言える。では、この課題に対して、どのような解決策があるだろうか。

出入国在留管理庁の調査によると、コロナ禍で減少した在留外国人は再び増加し、2022年6月時点で296万人を超え、過去最高を記録した。そして、日本で働く外国人も、2012年に68万人だったのが、2022年には182万人を超え、この10年間で3倍となった（厚生労働省 2023）。2022年の日本の労働力人口が6902万人であること（総務省統計局 2023）を踏まえると、日本の労働者の2.64%、つまり約40人に1人が外国人労働者ということになる。学生が大学を卒業して入っていく社会は、すでに多くの外国人が働く社会であり、卒業生は直接的、あるいは間接的に外国人と関わっていくことになる。

この現状を踏まえて、筆者は在学中に、日本で働く外国人について学び、交流する機会が持てれば、働き始めて職場等で外国人に関わることになった際に役に立つのではないかと考えた。また、外国人かどうかに関係なく働く人と関わることは学生たちが働くことについて考える機会となり、これからの進路選択や職業イメージ構築の助けにもなるだろう。

これらの理由に加え、筆者が通勤途中で見た駅の電子掲示板のお知らせも大きく影響している。通勤途中のある日、電車の時刻を確認するため、駅の構内にある電子掲示板を見ると、以下のお知らせが流れてきた。

《鶴見警察署からお知らせ》

6月には、政府が提唱する「外国人労働者問題啓発月間」です。来日外国人の不法滞在・不法就労防止活動にご協力をお願いします。

このお知らせを目にしたとき、これではまるで日本で働く外国人が犯罪者ではないかと、このようなお知らせが流れている現実には驚愕した。こうした文章に触れたとき、学生が本当にそうだろうかと批判的に捉える視点を養う責任が、日本語教師養成課程にはあるのではないだろうか。そのためには、日本で働く外国人について学ぶことが重要であると強く感じた。

以上の問題意識のもと、筆者は日本語教師養成課程で学ぶ学生が日本で働く外国人について理解を深めることができる場を設けることにした。本稿は、その実践の報告である。

続く第2節では、授業の概要を述べる。第3節では、交流会の準備として行ったことをまとめる。第4節では、交流会当日について詳述する。第5節では、交流会に参加した外国人へのアンケート結果と学生の振り返りレポートの分析結果を示す。最後の第6節で、交流会の目標が達成できたかを検討する。

2. 授業の概要

本節では、交流会を行った授業について説明し、交流会の目標と参加者について述べる。

2.1 授業の概要

交流会は、2022年度春学期に開講された日本語教育学概論（以下、概論）という授業（全15回）で実施した。概論は1年生担当科目で、日本語教

師養成課程を履修する学生が初めに受講することを想定した必修科目である。ただ日本語教師養成課程を履修しない学生も受講できる。

概論は、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について」で提示されている日本語教育人材の6つの活動分野—「生活者としての外国人」、留学生、児童生徒等、就労者、難民等、海外—に基づき、各分野の人々についての調べ学習や新聞記事の講読を通して、日本語教育がどのような分野なのか理解することを目的としている。

2022年度春学期の概論の受講者は11名であった。このうち8名が日本語教師養成課程を履修していた。ただ、履修時点で日本語教師になりたいと考えている学生は2名だけであった。

なお、概論では学期の初めに、学科・学年が多様になるように、筆者が3名4グループに、グループ分けを行った。だが、学期の途中で来なくなった学生がおり、最終的には3名のグループが2つ、2名のグループが2つとなった。2グループ合同で活動を行うこともあったが、基本的には一学期間、同じグループで活動をした。

詳細は第3節で述べるが、交流会の準備から実施までを表1にまとめる。

表1 事前学習から交流会実施までの流れ

【事前学習】

授業回	日にち	詳 細
第2回	4月15日	事前課題：在留外国人・外国人労働者数を調べる
		授業：調べた内容を共有してディスカッション
第6回	6月3日	事前課題：外国人労働者についての記事を読む
		授業：新聞記事についてディスカッション。発表テーマの決定
第7回	6月10日	事前課題：発表の準備
		授業：グループで発表
第8回	6月17日	授業：企業の方の講義



日本語教育を学ぶ大学生と日本で働く外国人との交流会

【交流会の準備】

第 9 回	6 月 24 日	授業：交流会で行う活動を考えた上で、グループごとの作業
第 10 回	7 月 1 日	
第 11 回	7 月 8 日	授業：やさしい日本語についての学習。全体でリハーサル



【交流会】

なお、交流会の開催日は、働く外国人を対象としていることから週末とし、学生全員が参加可能な 7 月 9 日（土）10：00～12：00 とした。

2.2 交流会の目標

第 1 節で述べた課題を踏まえ、交流会の目標を以下の 4 つに設定した。

- (1) 日本で外国人が雇用される背景について理解することができる。
- (2) 外国人を雇用する企業の思いや経験を理解することができる。
- (3) 日本で働く外国人を「外国人労働者」という枠組みで捉えるのではなく、名前や顔、そして歴史や文化を持った一人の人として理解することができる。
- (4) 「教える－教えられる」という関係ではなく、学び合う関係を築くことができる。

(1) と (2) は、交流会の企画・実施に向けた事前の活動を通して、(3) と (4) は交流会の実施を通して達成することを目指した。

2.3 交流会の参加者

交流会の参加者は、ゲストスピーカーとして授業に来てくださった方々の企業で働く 8 名の方である。ミャンマー人が 6 名、ベトナム人が 2 名で、全員が製造業で働いている。

交流会への参加依頼は交流会の約 1 か月前に、企業の方にメールで行っ

た。その後、学生が作成したちらしを送り、外国人の方への参加呼びかけをお願いした。交流会の1週間程度前に、企業の方より参加者名簿を受け取った。

ここで今回の取り組みに協力をいただいた企業とのつながりについて補足しておく。筆者は、企業と大学が連携した、外国人労働者に対する日本語教育の実現を目指して、2021年度に大阪樟蔭女子大学がある東大阪市の企業300社を対象にアンケート調査を実施したことがある（大河内・樋口2023）。そして、より深く外国人雇用の実態を理解するために、アンケート調査に協力いただいた企業のうち、複数社にインタビュー調査を実施した。インタビュー調査を通して、技能実習制度の問題点を指摘し、その問題点の解決を目指して、共通の問題意識を持つ企業と組合、さらには技能実習生受け入れのための管理団体を設立している企業の方と知り合った。このような企業であれば連携して何かできるのではないかと考え、連携をしていきたいことを伝えて賛同を得ることができた。今回はその第一歩として、企業の方にゲストスピーカーとして授業に来て話をしていただいた上で、外国人労働者との交流会を企画することにした。

今回協力いただいたのは、この企業1社とこの企業が紹介してくれた2社の合計3社である。いずれも業種は製造業で、すでに外国人を雇用している企業が2社、これから外国人を雇用する予定のある企業が1社であった。

3. 交流会の準備

本節では、交流会に先立ち授業で行った事前学習と交流会の準備についてまとめる。

3.1 調べ学習

まず、第1回と第2回授業で、日本社会の現状を考える機会を持った。

具体的には、第2回授業までに、在留外国人数に加え、国籍別、在留資格別、産業別の外国人労働者数を調べることを課題とした。第2回授業でその結果を共有し、なぜ愛知県に外国人労働者が多いのか、なぜ製造業で働く外国人が多いのかといった点について、グループディスカッションをした。

学生たちの中には日本で働く外国人は2万人と予想した人もおり、日本で暮らし働く外国人の数を調べて、その多さに驚いていた。また、東京都や大阪府などに外国人が多くいることは予想できたようだが、愛知県で働く外国人が多いことを初めて知った学生も複数名いた。

3.2 新聞記事の講読と発表

次に、第6回授業に向けて、いかに日本社会が外国人労働者に依存しているかがわかる新聞記事「外国人入国再停止 人手不足に拍車」『朝日新聞』を配布して、読んで自分の意見をまとめてくることを課題とした。第6回授業では、この課題を踏まえてグループディスカッションを行った。学生の中には記事に出てきている、きつい・汚い・危険を表す3Kということばを初めて聞いた人や、日本の若者が働かない職場で外国人が働く現状に初めて気づいた人もいた。

さらに、記事に書かれていることで、十分に理解できていない点をクラス全体で出し合って、グループごとに担当を決め、調べて発表することにした。学生たちが発表した内容は、技能実習制度、外国人労働者に対する政策、人手不足の現状の3点である。発表は第7回授業で行った。なお、2つのグループが合同で行ったため、発表は3つとなった。

3.3 ゲストスピーカーによる講義

第8回授業には、2.3で述べた企業3社の方に来ていただいた。授業の前半はクラス全体に向けて話をしてもらい、後半は各グループに企業の方

1 名が入り、小グループで質疑応答を行った。なお、この回は概論の受講者だけでなく、日本語教師養成課程を履修する学生にも声掛けをし、数名の学生が参加した。

企業の方からは、外国人雇用のいい点として、熱心に働く外国人従業員から日本人従業員が刺激を受けているという話があった。一方で、外国人従業員数が増えると、同じ国の従業員がグループを作って、他国の従業員とあまり関わらないという課題への言及もあった。また、外国で働く上で生活の安定が大切で、社員寮など生活面の支援に力が入れていることなど写真を提示しながら説明があった。さらに、日本語教育は、外国人だけでなく、日本人にも日本語でのコミュニケーションについて指導していく役割があるのではないかという問題提起がなされた。

今回ゲストスピーカーとして来てくださった方々は、代表取締役や社長という立場の方々に、学生たちは少し緊張していた。だが、小グループでの質疑応答の際は、企業はどのような学生を求めるのかといった就職活動に関連する話などもしており、多くの学生が、中高年の男性で社長といった肩書を持つ方と初めて話をしたが、話しやすい方々だったという感想を授業の振り返りで書いていた。

ここまで述べた活動は、上述した目標の(1)と(2)を達成するために行った活動である。

3.4 活動決めと準備

第9回授業で、第8回までの授業で学んだことや考えたことを踏まえて、交流会でどのような活動を行うかを、全体で話し合った。

まず、交流会の目的の1つである、学び合う関係を築くことを大切にしたいという思いから、日本で働く外国人（以下、参加者）からどのようなことを学びたいかをグループで話し合う時間を設けた。学生たちから

は、なぜ日本で働こうと思ったのか、日本で働いていちばん苦労したことは何か、日本で働いて学んだことは何かなどの仕事に関する事、日本の生活でいちばん難しいことは何か、相談したいことがある場合どうしているかなどの生活に関わる事、日本語の勉強はどのくらいしたか、日本人と会話が通じない場合どうしているかなどの日本語に関する事が知りたいという意見が出た。

次に、どのような活動を行うかを、全体で話し合った。その結果、自己紹介、レクリエーション、質問コーナー、体験コーナーの4つの活動を行うことになり、1つのグループが1つの活動を担当した。これ以降は、グループごとに、活動内容を具体化していった。

1) 自己紹介グループ

自己紹介グループは、自己紹介の内容や進め方、名札の作成について話し合った。自己紹介は、交流会の初めに全体で行うため、参加者が話しやすく、かつその人について知ることができる内容であることを考慮し、名前、好きな食べ物、日本の行きたいところの3点について紹介することにした。また、紹介する内容を画用紙に書き、自己紹介をする人はそれを持って行うことにした。名札は、参加者が交流会に来たときに、名前を聞き、学生たちがその場で養生テープに記入して、はってもらうことにした。

2) レクリエーショングループ

レクリエーショングループは、どのような活動を行うかを考えた。学生たちはレクリエーションの目的を打ち解けて仲良くなることとし、普段は働く人たちだからこそ、交流会では楽しんでほしいと考えていた。筆者からは仲良くなるだけでなく、日本語や日本文化に触れる機会にもしてほしいと伝えた。はんかち落としや消しゴム取りなどの候補が出たが、最終的

にはフルーツバスケットと飴取りゲームに決まった。

フルーツバスケットでは、学生たちはその場でお題を考えてもらうつもりでいたが、参加者の日本語能力が事前にわからなかったため、その場でお題を考えるのが難しい可能性もあるのではないかと筆者が指摘した。その結果、事前にお題を絵付きで画用紙に書いておくことになった。飴取りゲームは、音楽を流して音楽が止まったときに、机の上に置いてある飴を取るゲームである。流す音楽を、大学生に人気がある音楽にすることで、若者文化に触れる機会とし、ミュージックビデオ等の動画サイトのQRコードを載せた音楽リストを配布することにした。

3) 質問コーナーグループ

質問コーナーグループは、準備の初めの段階で考えた、日本で働く外国人から学びたいことを質問する時間とした。活動はグループごとに行い、質問文を書いた紙を袋に入れておいて参加者に引いてもらうというくじ引きのようなやり方で進めることにした。また、学生からの質問だけでなく、参加者が学生たちに質問する時間も設けることにした。さらに、他のグループで話された内容も知りたいという意見が他のグループから出たので、質問コーナーの最後に、全体で共有する時間を設けることにした。

4) 体験コーナーグループ

体験コーナーグループは、日本文化に触れることができ、かつ実際に手を動かす活動が楽しいだろうと考え、うちわ・扇子を作成することにした。うちわか扇子を選んでもらい、色鉛筆や折り紙等で装飾をして、最後にグループで優秀作品を1つ選び、景品を渡すことにした。

話し合いを含めたこれらの準備は、第9回と第10回の授業で行った。ただ、授業内で終わらず、授業外に準備を行ったグループもある。

日本語教育を学ぶ大学生と日本で働く外国人との交流会

さらに、今回の交流会のちらしの作成、ちらしに QR コードをつけて視聴できるようにした案内動画の作成もした。これらの作業は、すべて学生たちが分担して授業内外で行った。

交流会前の最後の授業である第 11 回では、筆者がやさしい日本語について講義した後、初めから最後まで通して全体リハーサルを行った。

4. 交流会当日

開催場所は大学の教室で、学生たちは開始 1 時間前の 9 時に集合し、机を端に寄せたり、椅子を円になるように並べたりした。また、各活動で必要なものや受付も準備をした。準備が予定より早く終わったことから、絵を描くのが好きな学生が教室のホワイトボードにイラストを描きたいと言って、日本の国旗を持った女の子や今回作成するうちわなどの絵を描いてくれた。

10 時 15 分前に、案内担当の学生 2 名が大学の正門に行き、参加者を出迎え、教室まで案内した。遅れている参加者もいたが、開始時間になり、司会の学生が挨拶をして交流会を始めた。

4.1 自己紹介

円になるように置いた椅子に全員が座り、自己紹介グループの学生から座っている順番に、名前、好きな食べ物、日本の行きたいところについて自己紹介を行った。

参加者からは、好きな食べ物として「すし」や「たこ焼き」が、行きたい場所として「京都」や「東京」が挙がっていた。学生たちからはうなずいたり「同じ」と言ったりしたリアクションがあった。また、「すし」が好きな学生が「私もすしが好きです」と言って、「すし」が好きだと自己紹介をした参加者のほうを見て話す場面もあった。自己紹介で話す内容が

画用紙に書かれていたことで、特に困ることなく進められた。



写真1 自己紹介の様子

4.2 フルーツバスケット

円の真ん中に机を置き、机の上に、「しろいくつのひと」や「かみがながいひと」といったお題が書かれた画用紙を置いた。真ん中に立った人が、画用紙を一枚引いて、書かれているお題を読み上げ、該当する人たちが席を移動した。

学生たちが説明をして、見本を見せた後、実際にゲームを行ったが、参加者たちはフルーツバスケットのルールをしっかりと理解できていた。参加者も学生も、我先にと空いている椅子に向かって走っていて、座れたときは歓声が、座れなかったときは悔しがる声が教室に響き渡っていた。参加者の中には、お題を読み上げることが難しい人もいたが、その時はレクリエーショングループの学生たちが耳元で読み上げ、参加者が繰り返すということが行われた。また、参加者が靴の意味がわからない場面もあったが、指さしで示したり、参加者の母語で説明したりしていた。互いに臨機応変に対応していて、フルーツバスケットに参加せず輪の外側から見ていた筆者には、全員が楽しんでいると感じられた。



写真2 フルーツバスケットの様子

4.3 飴取りゲーム

3つ目の活動である飴取りゲームから、グループに分かれて活動をした。学生3, 4名と参加者3, 4名で、計6, 7名のグループを3つ作った。グループに分かれた後、再度グループ内で自己紹介をしてから、飴取りゲームを行った。

飴取りゲーム担当の学生が、全体にルールを説明した後に、準備しておいたプレイリストから音楽を流した。そして、音楽が止まったときにいちばん速く飴を取ることができたら勝ちである。音楽が流れているときは、真剣な顔をして飴を見ているが、音楽が止まると、飴を取り合っていた。飴が取れても取れなくても、大きな歓声や笑い声があがっていた。



写真3 音楽が止まった後の様子

活動の最後に、作成した音楽リストを配布した。使用した音楽の中には、ONE PIECE の「ウィーアー！」や NARUTO の「ブルーバード」などアニメの主題歌もあり、リストにはアニメの紹介もあった。参加者と学生はリストを見ながらアニメについて話したりもしていた。

4.4 質問コーナー

フルーツバスケットや飴取りゲームをして、打ち解けた雰囲気の中で、質問コーナーが始まった。質問コーナーは、参加者に質問したいことを書いた紙を一枚ずつ引いてもらい、そこに書かれている質問に答えてもらった。質問には、「日本に来て困ったことは何ですか」や「日本に来た理由は何ですか」といったものがあつた。困ったこととして、日本の公共交通機関は難しい、日本語が難しいといったことが話されていた。また、日本に来た理由には、家族のために働きに来ているといった理由があつた。

各グループ、紙に書かれた質問だけでなく、具体的な仕事の内容や趣味など、その他の質問もしていた。また、逆に参加者から学生へ、週末の過ごし方や大学で学んでいることなどについて尋ねている人もいた。最後に、各グループの代表者1名が前に出て、そのグループで話された内容を全体に伝え、共有をした。

4.5 体験コーナー

最後の活動は体験コーナーで、各自がうちわか扇子かを選んで、無地のうちわと扇子に自由に装飾を施した。黙々と作業に打ち込んだり、質問コーナーの延長として互いのことを話したりしていた。ある参加者は恋人を国に残して日本に働きに来ていることを話していた。その他、週末の過ごし方や日本語の勉強の仕方などが話題に上がっていた。活動の説明で使う表現はリハーサルで確認したが、ここでの雑談は自由な会話で、学生たちは

日本語教育を学ぶ大学生と日本で働く外国人との交流会

方言やくだけた表現を使ってしまい、参加者に伝わらないということが起きていた。だが、学生たちなりに言い換えたり、日本語がよくできる参加者や留学生が通訳をしたりして、コミュニケーションをとっていた。

終了時刻が近づいていたので、完成していない人もいたが、各グループで、そのグループの優秀作品を1つ選んだ。そして、選ばれた3名には景品のお菓子をプレゼントした。



写真4 うちわ・扇子を作っている様子

最後に、司会の学生より閉会の挨拶をして、全員で記念撮影をした。その後、参加者にはアンケートに回答いただき、終わった人から帰ってもらうよう考えていたが、参加者は机や椅子を元の場所に戻す作業まで手伝ってくれた。

5. 交流会参加者へのアンケートの結果及び学生の振り返りレポートの分析結果

本節では、前節で詳述した交流会に参加した参加者へのアンケートの結果、及び交流会の企画・実施を担当した学生たちの実施後の振り返りレポートの分析結果を示す。

5.1 参加者へのアンケート結果¹⁾

アンケートには8名全員の方が回答してくれた。6名の方がすべて日本語で記入し、1名の方が一部ベトナム語、1名の方がミャンマー語で記入していた。翻訳は、本学のベトナム人留学生とミャンマー人留学生に依頼した。

質問項目は以下の通りである。今回の交流会に関わる質問1)～3)について、アンケート結果をまとめる。

- 1) 今日の交流会はどうだったか（選択式）、その理由（記述式）
- 2) また交流会があったら参加したいか（選択式）、その理由（記述式）
- 3) 交流会でどんなことをしたいか（記述式）
- 4) 会社の他に、日本語で話す機会があるか（記述式）
- 5) 日本でしたいこと（記述式）
- 6) その他の感想（記述式）

5.1.1 交流会の満足度

交流会の満足度は、「とても満足」、「満足」、「あまり満足ではない」、「満足ではない」の4択から1つ選んでもらった。参加者8名全員が「とても満足」を選んでいった。

「とても満足」を選んだ理由では、「ゲームしたり、にほんごでおしゃべりしたのでたのしかった」というように、いろいろな活動をして楽しかったと書いている人が6名いた。また「みんなはやさしくしてくれたから」と、学生が親切であったことを書いている人が2名いた。なお、無記入は1名であった。

全員が「とても満足」を選んだのは、学生たちへの配慮があると思われるが、職場とは違う場で、日本語を使ったさまざまな活動を楽しんでくれ

たことがわかる。

5.1.2 今後の交流会への参加

また交流会があったら参加したいかという質問は、「はい」か「いいえ」の選択式である。8名全員が「はい」を選んでいてた。

参加したい理由は、楽しいからと書いている人が3名、友達に会えると書いている人が3名いた。その他に、「日本人とお話しするのはすきだから」や「じぶんがしりたいこともしつもんできる」といった意見もあった。なお、無記入は1名であった。

参加したい理由から、今回の交流会で参加者と学生が友達のような関わりができたことが推測できる。参加者は交流会に、職場の上下関係や同僚関係とは違った、友達のような関係性を求めているのであろう。

5.1.3 交流会でしたいこと

交流会でしたいことについては、自由に意見を書いてもらった。最も多くの方が書いていたのはゲームがしたいという意見で、5名が書いていた。その他に、「ともだちを作ったり」したいという意見が2名、「うたとかをみんなでうたいたいです」という意見が1名であった。

今回の交流会で行ったゲームは、フルーツバスケットと飴取りゲームであった。実施前は、成人した人たちがこうした活動を楽しんでくれるのか、筆者の中には不安な気持ちがあったが、実施してみると、飴を取れずに悔しんでいる姿や誰よりも速く椅子に座ろうとする姿を目にして、参加者が楽しんでいることが伝わってきた。アンケート結果も踏まえると、日本語を学ぶということだけでなく、日本語を使って楽しむ機会が求められているのかもしれない。

以上、参加者にとって、今回の交流会が、日本語を使える場であったこと、また年齢の近い人との関わりの中で仕事を離れて楽しむことができる場であったことが、アンケート結果から示唆された。だが、参加者と学生の間で働くことについて意見交換が行われたかを把握することはできなかった。これは、アンケートにそのような質問項目がなかったことが原因であり、今後アンケートを作成する際の課題としたい。

5.2 学生の振り返りレポートの分析結果²⁾

交流会終了後に、学生たちには振り返りレポートを提出してもらった。振り返りレポートは、概論を履修している11名の学生のうち、9名から提出があった。そして、本実践報告への掲載を許可してくれたのはそのうち8名であった。

8名の振り返りレポートを気づき・学びという点から分類すると、外国人労働者についての気づき・学び、参加者との関わりについての気づき・学び、企画・実施についての気づき・学びという3つのカテゴリーに分類することができた。本項では、各カテゴリーについて、学生が書いた記述を引用³⁾しながら説明していく。

5.2.1 外国人労働者についての気づき・学び

交流会で東大阪で働く外国人に関わったことによって、学生たちには外国人労働者についての気づき・学びが起きていた。ここでの気づき・学びは2点あり、交流会前に外国人労働者に対して持っていたイメージの偏りへの気づきと、参加者の姿・姿勢からの刺激である。

1つ目の自分が持つイメージの偏りへの気づきは、交流会を対面で行ったからこそ得られた気づきである。

最初、外国人労働者と聞いて、仕事に打ち込んでいて真面目な方達ばかりなんだろうなと思っていたけど、皆さん明るくて仕事だけでなく趣味もあり、恋人もいたりなどイメージしていた人柄とは真逆であった。ニュースや新聞で見て外国人労働者はこういう人という偏ったイメージを持っている人たちは多いと思う。しかし実際は違った。このように実際に会って話してみないとその人のことはわからないと学べた。(学生 Y)

「外国人労働者の方」と聞いて私の中で男性をイメージしていたのだが、多くの方が女性であり意外性を感じた。(学生 O)

学生たちはこれまでニュース等で見聞きして知ったことに加え、新聞記事で知った 3K の仕事やゲストスピーカーの話から製造工場での仕事を、日本人の若者に代わって外国人が担っていることを学んでいた。その中で外国人労働者に対するイメージを作り上げていたものと思われる。だが、上記の記述から、実際に参加者と対面で交流をしたことで、自分がこれまで持っていた外国人労働者に対するイメージが偏っていたこと、それがニュースや新聞等のメディアによって作り上げられていることに気がついたことがわかる。これは対面で参加者と出会い、互いのことをゆっくり話す時間があつたことで可能になっており、ここから、交流会の目標 (3) は、達成することができたと言えるだろう。

2 つ目は、学生たちが参加者の姿・姿勢から多くの刺激を受けていた点である。

仕事は大変と言いながら、家族のために一生懸命働いている外国人実習生の方は素晴らしいと思う。(学生 T)

中には母語を日本語に翻訳して Instagram や Facebook で発信をしているという方もいて、日本語を勉強すると同時に母国の人にも発信することとは誰にでもできることではないと思い、すごいと感じた。(学生 E)

参加者たちが家族から離れて外国である日本に来て仕事をするという状況の中でも、懸命に働き、また積極的に活動する姿から、学生たちは刺激と学びを得ていた。本交流会では、「教える－教えられる」関係が固定するのではなく、学び合う関係の構築を目指していたが、この目標 (4) もおおむね達成できたと思われる。

5.2.2 参加者との関わりについての気づき・学び

参加者との関わりについての気づき・学びには、やさしい日本語の難しさとやりとりの難しさの2点に関する気づき・学びが含まれる。

1つ目のやさしい日本語の難しさに関しては、ほとんどの学生が書いていた。

やさしい日本語はとても難しく感じたのである。例えば、私たちが毎日使っている関西弁の方言は語尾やイントネーションが外国人の人が学ぶことが多い標準語と異なることが多いので、その都度考えることが大変だったのである。(学生 I)

交流会の前日の授業で、やさしい日本語について説明をして、交流会でどのように説明をするといいか、表現の再検討を行った。ただ、これまで自分が使っている日本語に注意を向けたことがない学生がほとんどで、一朝一夕でやさしい日本語が使えるようになるわけではない。今回の交流会

が自分の使う日本語に意識を向けるきっかけになればと考える。

2つ目のやりとりの難しさは、交流会が単発の企画であったことが影響していると思われる。

外国人実習生の方にどこまで聞いて良いのか判断がつかなかっただ。日本に来た理由を聞くと、家族のために働きにきていると言っていた。家族のために働くことは辛いのか、家族に会いたいか、など聞いて良いのか分からず、会話を広げることが出来なかった。当たり障りのない会話ばかりしていて、外国人実習生の方の本音をうまく引き出せなかったと自分でも実感している。(学生 T)

どこまでなら相手に質問していいかという問いに正解はない。一回限りの交流ではなく、継続的に交流を行っていくことで、参加者と学生の関係が構築され、その過程でどこまで質問していいかといったことが相互に模索され、わかってくるのではないだろうか。他にも「質問をせばかりでいいのかと不安になったりした」(学生 O) という記述もあった。これらはどのような人間関係においても言えることである。

参加者との関わりについての気づき・学びは学生たちが卒業後社会に出て、外国人と関わることになった際に、役に立つであろう。つまり今回の交流会の実施は、日本語教師を目指さない学生にとっても意義があったと考えられる。

5.2.3 企画・実施についての気づき・学び

企画・実施についての気づき・学びには、交流会を企画する大変さ、相手の立場に立って準備する大切さ、協調性・積極性の大切さという3点の気づき・学びが含まれている。

1つ目は、交流会を企画する大変さについての気づき・学びである。コロナ禍で大学生活を送る学生たちは、これまでにイベントを経験する機会がなかったという。今回はじめて企画から実施に至るまでの過程に携わったことで得られた気づき・学びだと言える。

交流会の準備・実施を通して得られた学びや気づきは、交流会を開催するまでに内容の決定や道具の用意などのさまざまな準備が必要であることです。また準備をするためにはたくさんの時間が必要なことも学びました。(学生N)

その他に「リハーサル段階で全体的にあまりイメージがわいていなかったのが当日も少し段取りが良くない時があった」(学生I)という記述もあった。前日の授業で、当日の役割分担や説明時の表現を確認するために、全体リハーサルを行ったが、リハーサルの目的が学生と十分に共有できていなかったことがこの記述からわかる。学生たちが対面での活動をあまり経験したことがない点を考慮し、事前に交流会のイメージを共有する機会を設ける必要があった。今回の経験で得た気づきや学びを次に活かせるよう継続的に活動を行い、先輩から後輩へと知識を継承していく仕組みを作るとよいだろう。

2つ目の気づき・学びは、相手の立場に立って準備する大切さについてである。

このような一般人から配られるような紙(= 飴取りゲームで配布した音楽リスト)を作成するのは初めてだったためどのようにしたら外国人の方にわかりやすくそして見ていただけるのを作れるのかとても悩んだ。しかし私視点で考えてみると文章だけで白黒のかみをもらって

も嬉しくないと感じた。だからそれらに関係している画像などをはりつけた。とても大変な作業だったが私の経験値になった。(学生 A)

その他に、質問コーナーで「[日本と母国の違い]」のように漠然とした質問には外国人労働者の方が答えづらかったように見えた」(学生 O)という記述もあった。相手が外国人だからというよりも、自分が参加する側の立場だったらどう思うかという視点から、学生たちは配布プリントなどについて検討しており、相手の立場に立って考える大切さへの気づきが得られている。

3つ目は、協調性・積極性の大切さについての気づき・学びである。特に準備の段階で、グループ内、またはグループ間で協力して進めることの大切さ、積極的に他のメンバーに働きかける大切さを学んでいた。

グループ活動をするときには協調性や積極性が必要だと気付いた。誰かから話しかけて貰うのを待つのではなく、困っている時自分から提案したりすると、グループに貢献することができたと感じたので行動してよかったと思った。(学生 E)

これらの企画・実施についての気づき・学びは、今回の交流会を通して学生たちに学んでほしい目標として事前に挙げていたものではなかったが、学生たちがはじめて交流会の企画から実施までを行ったことで、得られたことが振り返りレポートの分析から明らかとなった。この気づき・学びは、今回の交流会実施における副産物だと言えるであろう。

6. 結び

最後に本節では、交流会の4つの目標が達成されたかについて述べ、本稿の結びとしたい。

1つ目の目標は外国人が雇用される背景についての理解であった。学生たちは、新聞記事から3Kということばを学び、3Kの職場では人手不足が深刻化している現状の理解に至っていた。ゲストスピーカーの講義と交流会においても、企業の方と参加者から具体的な仕事内容などを聞くことで理解が深まっており、目標（1）は達成できたと考える。

2つ目の目標は外国人を雇用する企業についての理解であった。ゲストスピーカーである企業の方々とのやりとりからは、人手不足という現状が外国人労働者の雇用につながっているからといって、企業が外国人労働者を単なる労働力と見なすのではなく、生活面も含めて支援を行っていることを知ることができた。メディアで取り上げられるのは外国人労働者が劣悪な環境で働かせられているなどの暗いニュースが多いが、そのような企業ばかりでなく、雇用する外国人を大切にする企業があることを学んでいた。これも参加者との交流を通して、参加者の視点から企業を捉え直すことで理解が深まり、目標（2）の達成につながっていると思われる。

3つ目の目標は日本で働く外国人に対する理解であった。学生たちは参加者とのやりとりから、参加者の働く面だけでなく、母国に家族や恋人がいることや週末は友達と過ごしたり買い物に行ったりしていることなどを知り、名前や顔を持った人であることはもちろん、歴史や文化を持った一人の人として参加者を捉えることができるようになったと考えられる。5.2.1で述べたように、学生の振り返りレポートからも目標（3）は達成できたと言える。そして、この目標の達成こそが「外国人労働者問題啓発月間」のお知らせを見た際に、本当にそうだろうかと批判的に捉える視点につな

がるはずである。

4つ目の目標は学び合う関係の構築であった。学生たちは参加者の姿や姿勢から刺激を得ていた。また、参加者の日本の公共交通機関が難しいといった困った経験の話から、今の日本に足りない部分についての気づきがあった。参加者も学生たちに日本語の表現だけでなく大学生活について質問するなどして学びを得ていたと思われる。さらに、学び合う関係の構築は、参加者と学生たちの間でだけ起きていたわけではない。交流会の準備段階で、説明の日本語がやさしい日本語になっているか、作成した資料がわかりにくくないか、学年を超えて学生間で指摘し合う姿が見られた。参加者と学生の間、学生と学生の間で、学び合いが起きており、目標（4）も達成できたと言えるだろう。

この学び合う関係の構築に関して1点付け加えておきたい。それは教員である筆者もまた学生から学びを得ていたことである。準備の段階で、学生たちがフルーツバスケットや飴取りゲームを提案した際、筆者はこの活動を通して参加者にはどのような学びがあるのかを何度か学生たちに問うていた。仕事のない日にわざわざ交流会に来てもらうので、参加者に何かしらの学びを提供したいと考えていたのである。だが、学生たちは、普段働く人だからこそ楽しむことを重視してゲームをしたいと主張した。学生の提案を受け入れて、実際にこれらのゲームをやってみると、参加者も学生も非常に楽しそうであった。参加者アンケートと学生が提出した振り返りレポートには、楽しかったという記述が多く見られた。ここから、筆者自身が学びを限定的に捉え、学びに縛られていたことを痛感した。相手を一人の人として理解するためには、まずは関わりたいと思えること、言い換えると、関わるのが楽しいと思えることが重要なかもしれない。楽しいと思えるからこそ、人は関わろうとするのだろう。目標(4)に関しては、学生と教員の間でも学び合いが起きていた。

以上、本実践では東大阪で働く外国人の方に来ていただき、交流会を行った。働くということについて参加者と学生の間で十分に議論を深めることができなかったと感じるものの、交流会の目標は達成することができ、実践の出発点で示した日本語教師を目指さない学生にとっても意義のある活動になっていたのではないだろうか。学生たちには社会に出てからもここでの気づきや学びを忘れないでほしいと切に願う。

注

- 1) アンケート結果、及び写真の本実践報告への掲載は、アンケートで同意を得ている。
- 2) 振り返りレポートは、①交流会の準備・実施を通して得られた学びや気づき、②交流会の準備や実施で難しかった点や悩んだ点、及びそれへの対処方法、③その他感じたこと、の3点について書いてもらった。
- 3) 学生の振り返りレポートには誤字脱字があるが、そのまま引用する。

参考文献

- 『朝日新聞』2021年12月22日朝刊「外国人入国再停止 人手不足に拍車」
大河内瞳・樋口尊子（2023）「外国人を雇用する企業に対する実態調査」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』13, 1-10.
- 厚生労働省（2023）「「外国人雇用状況」の届け出状況まとめ【本文】（令和4年10月末現在）」
<https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/001044543.pdf>（最終閲覧日 2023年5月7日）
- 総務省統計局（2023）「労働力調査（基本集計）2022年（令和4年）平均」
<https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/ft/pdf/index1.pdf>（最終閲覧日 2023年5月7日）
- 文化庁（2020）「令和元年日本語教育総合調査—大学における日本語教師養成課程について—報告書」
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_

日本語教育を学ぶ大学生と日本で働く外国人との交流会

sogo/pdf/92254401_01.pdf（最終閲覧日 2023 年 5 月 7 日）

朝鮮漢文短編小説集（V）

人の性と情篇（下）

梅 山 秀 幸

四十一、李章吾を支えた朴敏行

同知の朴敏行¹⁾は早くに孤児になって、頼る親族もなく、銅峴の薬局に身を寄せて、精一杯に働いた。まだ十五歳であった。

ある日、簾の中から外をのぞいていると、一人の青年が驢馬にまたがって通り過ぎた。敏行はその青年について行って、青年の家に着いた。その青年は李章吾²⁾という両班であった。敏行は李公に仕えることを志願した。李公は一見してこれを許し、その来歴を問うことなく、諸事を敏行に任せ、さらには富家の娘を娶らせた。その妻というのは富家の鍾愛の娘だったから、持参金と所帯道具を豪奢にそろえてやって来て、敏行はにわかに巨富となったが、敏行はそれを有り難いとも思わず、草芥のようにしか考えなかった。

妻を娶った後もなお、敏行は賭場に出入りして、豪傑の士と交わり、海や山を周遊して、放蕩の限りを尽くした。李公の家人たちは誹謗中傷を雨霰のごとくに浴びせたが、李公自身は意に介さず、以前と同じように、敏行に接した。家人たちでこれを怪しまない者はなかった。

しばらくして、李公が特別な推薦を受けて禁軍別将となった。

英祖の乙亥の年（1755）のことである。当時の統制使³⁾の所業が王の御前で問題となり、李公が新たに統制使に任命された。その最初の仕事とし

て、前任の統制使を押送して来なくてはならない。

李公はすぐに任地に赴くことになり、家に知らせて、

「朴敏行を呼んで、行装をととのえて私についてくるようにいってほしい」といった。家には食客が雲のように大勢いたが、みながそれぞれに、

「いまや李公は、不安この上なく、その危険が測り知れないところに赴任するのだ。なのに、ただあの破落戸^{ころつき}一人だけを連れて行くという。なんとも迂闊なことではあるまいか」

といった。

しかし、李公は周囲のことばにまったく耳を貸さず、しいて敏行を連れて任地に赴き、前任の統制使をすぐに押送することができた。

その当日、統営の中は人心が恐々として、朝夕のあいだにどのような変故が生じるか心配でならなかった。文書も山積していて、機務は複雑至極である。敏行はひそかに計策を練って、諸般の問題をひとつひとつ的確に決裁した。そして、前任の統制使の帳簿を調査して四、五万金の不正所得を明らかにして、これを李公に報告した。

「この金をどのように処理なさいますか」

「君のいいように処理するがよい」

「はい、そうします」

敏行はそういって、出て行った。敏行はその日の夜、洗兵館⁴⁾で盛大に宴会を催し、牛一頭を屠殺して兵士たちをもてなして、その金をことごとく使い果たした。また各官衙と各里の古くなった逋欠⁵⁾と久しくなった病弊を調査してすべて洗い出し、欠損は補償してやった。敏行は、

「これは新統制使の命じられたことだ」

といい、兵士と住民たちはたがいに喜び、雷のように歓声を上げた。人心はその日のうちに打ち解けて安定した。

敏行が官営に入って行って、事の顛末を告げると、李公はただ頷くだけ

であった。

ついに危機を安泰に変え、李公の威厳は三道に振るい、任期をまっとうしてソウルに戻ることができた。

後日、朴敏行は有能な幕僚として世間で有名になった。おおよそ、李公の知鑑と敏行の抱負、この二つがうまく合わさって成されたことである。

（『海東野書』）

- 1) 朴敏行：『朝鮮実録』正祖三年（1779）正月己亥に、錢を鑄造して弄奸をふるまう監属の朴敏行を龍配した旨の記事がある。
- 2) 李章吾：1714～1781。朝鮮後期の武臣。本貫は全州。字は子明、号は蓮溪。孝寧大君・補の十二世の孫。工曹判書の重庚の子。勇力が抜きんでて、兵書に精通し、射術に巧みだった。1743年、紗里坪で武術演習があった際、その実力を認められ、王から豹の毛皮を下賜された。1776年、訓練大将となったが、民家から略奪した嫌疑で左遷され、さらに珍島に圍籬安置され、後に赦された。
- 3) 統制使：忠清・全羅・慶尚の三道の水軍を指揮する官職。三道水軍統制使。初期の朝鮮では水軍は各道の水軍節度使が指揮したが、1592年の豊臣秀吉の侵略以後、忠清・全羅・慶尚の三道の水軍を総指揮する職責が必要となり、三道水軍統制使を新設して、全羅左水使だった李舜臣をこれに当てて水軍を総指揮させたのが始まり。
- 4) 洗兵館：統営にあった樓館。
- 5) 逋欠：官有の物の欠損。

四十二、飢え死にをした洪生員と二人の娘

昭義門¹⁾の外に住む洪生員は^{やもめ}鰥夫として娘二人とともに暮らしていた。家は貧しく、口に糊することもやっとであった。いつも燠造幕²⁾の役夫た

ちのいる所に行っては食事を乞うのであった。役夫たちは各自が飯一匙を与えて、洪生員はそれを芥子菜の葉に包んで持ち帰っては、二人の娘に食べさせたのである。

ある日、洪生員はいつものように飯をもらいにやって来た。役夫の一人が酒に酔って、洪生員を辱めた。

「洪生員はいったい燠造幕の府君堂³⁾なのか。われわれのご主人さまなのか。どういうわけで、毎日、われわれは食事を供えねばならないのか」

洪生員は涙を吞んで帰って行った。そして家の中に入って行って、五、六日が経っても、柴の戸は閉じたままであった。一人の役夫が柴の戸を推して家の中に入ると、洪生員と二人の女兒が突っ伏して泣いている。役夫は気の毒になって、いそいで出て、粥を煮て来て、それを勧めた。

洪生員は十三歳になる長女にいった。

「お前たちはこの粥を食べたいか。私たち三人は苦しみながらひもじさに堪え、この五、六日を過ごすことができた。今は死が訪れようとしている。これまでの苦しみに堪えた苦労が無駄になる。いまこの一碗の飯を食べて、この人がまた続けて恵んでくれればいいが、また先日のような辱めを受けることになるのは目に見えている」

洪生員がこのようなことをいっていると、五歳の次女が粥の匂いを嗅いで起き上がろうとした。長女はこれを手で押さえていった。

「寝るのよ、寝るのよ」

翌日、役人たちがこの家に入って行って見ると、三人ともに死んでいた。これを聞いて涙を流さない者はなかった。直接にそれを目撃した燠造幕の役夫たちのそのときの心境はいかなるものであったろうか。

はなはだしいかな、この貧しさは。わたくしの家にあっても、至極に貧しく物哀しいが、この洪生員に比してみれば、嘆き悲しむほどのものではない。

(『禦睡新話』)

- 1) 昭義門：徳寿宮の外にあった西小門の本来の名。
- 2) 燠造幕：官庁に貢納する味噌玉麴を醸造するところ。
- 3) 府君堂：各官衙で神霊を祭った堂。

四十三、年老いて若い賢夫人を娶った尹絳

判書の尹絳^{ユンカン}¹⁾は六十歳になって、龍仁の金梁村の柳氏の家の女子を妾として迎えることにして、その婚姻の二日前に柳氏の村に下って行って宿泊した。柳氏の娘は年老いた婢を尹判書の宿所に送って、自身の気持ちを伝えさせた。

「老齢にもかかわらず、氣力でもって、遠いところにおいでくださいましたが、旅毒（旅の疲れ）はございませんか。聞くところでは、わたくしのためにこの長旅をなさったのだとか、恐れ多くて身の置き所ありません。わたくしの家はたとえ寒微であっても、この田舎の片隅で両班の名をもっています。いまわたくしが宰相のお宅に妾として入ったならば、中庶人として留まり、永遠に家門を挽回する望みがなくなります。この一介の不肖の女子のために親族の家の門戸を誤らせることになります。考えがこのことに及んで、心の中に自然に切ない気持ちが生じました。ひそかに伏して考えますに、大監はすでに地位が六卿となり、年齢も還暦を越えていらっしゃる。婚閥でたとえ光り輝くことがなくとも、身を損ねることはないはずです。この愚かな女子の不憫な立場に同情して、寛大に約定を変え、せめて普通の礼でもってわたくしを迎え、妾ではなく、正室の名をくだされば、わたくしの家門に栄光と感激は止まることはないでしょう。女子の身でこのようなことばはいかにも唐突なことはわかっていますが、恥を忍んで申し上げます。いかがでしょうか」

尹判書は、

「そのことばどおりに行うことにしよう」

といって、すぐに婚書を改めて書いて送った。そして衣冠を整えて婚礼の場に出て行った。初夜を過ごして改めて考えて見ると、心で十分に納得がいったわけではない。死肉を食らったような気になって、とうてい新婚の気分ではない。それで、すぐにソウルの家に戻ってしまった。それから、足が途絶え、連絡することもなかった。柳氏の父母は娘を咎めた。

「当初の約束のままに妾になれば、このような心配はなかったのだ。空しく唐突な計略を出して、自分の一生を誤ってしまったのだ。誰を怨むことができるか」

一年が経って、柳氏は父母に夫の家に行くことを告げた。それに対して、父母は、

「大監はまったくお前を顧みない。すでに楚と越のようなものだ。お前はどんな顔をしてあの家に入ろうというのか」

といった。娘は、

「わたくしはすでに尹氏の妻です。棄てられたとしても、尹氏の家で死ぬべきであり、父母の家に留まるべきではありません。奴婢たちを大勢つけて、わたくしを轎子に載せてソウルに送ってください」

といった。

柳氏の家は豊かだったから、婚行(嫁入り)の装備を盛んにして出発した。尹判書の家の前に着くと、その家の奴婢たちが、

「どこから来た内行(婦女子の旅)でしょうか」

と尋ねると、

「新しい奥さまの嫁入りです」

と答える。

尹判書の家では上下みなが冷ややかで、これを迎え入れようという様子がなかった。柳氏は行廊を清掃させ、部屋を清潔にさせると、轎子から下り、

その部屋に入って座った。

その当時、尹氏の長男は持平まで昇ったが、すでに死んでいて、次男の議政公²⁾は承旨であり、三男の東山公³⁾は校理であった。この日はともに不在で、柳氏は自分の連れて来た下人たちに二人の帰宅を門前で待たせて、二人が帰って来たら自分のところに連れて来るように命じた。

承旨と校理の二人の兄弟が帰って来ると、門のところになぜか大勢の輻輳きたちがいる。尋ねてみると、それが龍仁からやって来た者たちであるという。まず父親に会って相談した後に、どう応接したものか決めようとして、舎廊に向かったところ、柳家の壮健な奴僕が兄弟を取り拉いで、冠を脱がせ、柳氏が座っている部屋の扉の前に伏せさせた。柳氏は扉に寄りかかって座り、声を上げて叱りつけた。

「わたくしの門閥は低くとも、大監から正式に六礼の節次⁴⁾を受けている。すなわち、お前たちにとって母なのだ。それが百里もないところにいるのに、子たるものが、一年を過ぎても一度として見舞いにも来ない。大監が放ったらかしなのは、怨むに足りない。しかし、お前たちの振る舞いはまことに驚くべきものである。わたくしがやって来てここに座っているのがわかっているのに、外から帰ってきてすぐにこのわたくしのところに来ず、まず舎廊に向かおうとした。これははなはだ非礼ではないか」

承旨と校理の兄弟はそれぞれ自分たちの過ちを伏して詫げるしかなかった。柳氏はさらに、

「わたくしはお前たちを笞で打つべきだが、お前たちは王さまに仕えている身だ。今はそれを猶予しよう。起ち上がって冠をかぶり、自分の部屋に戻るがよい」

といったが、続けて、前に近づいて座るようにいい、

「大監は最近、起居、寝食はいかがであろうか」

と尋ねた。その言辞には威厳があったが、氷を融かすような穏和な空気が

あった。

柳氏が行廊に入って来て座ったときから、尹判書は奴婢たちに柳氏の動静をいちいち探らせては報告させたが、始め、二人の息子が柳氏の前に連れていかれたと聞いて、

「どうやら私は悍婦を得て、横逆が生じてしまった。この家は滅ぶしかない」

といったが、後に、息子たちをたしなめたことばが厳しく、その意志も正しいのを聞いて、膝を打って嘆賞した。

「賢明な婦人だ、賢明な婦人だ。私が入柄を理解せず、久しく薄待したのは、まことに愚かだった」

すぐに家中の人に命じて正寝を掃除させ、夫人を招き入れた。一門の上下老少はいっせいに夫人に挨拶をした。

大監と夫人は琴瑟相和し、家庭は和睦した。柳夫人は二人の子どもを産んだが、それが趾慶^{チキョン}⁵⁾と趾仁^{チイン}⁶⁾の兄弟である。趾慶の子の容は判書となり、趾仁は兵曹判書にまで昇った。

(『東稗洛誦』)

- 1) 尹絳:1597～1667 字は子駿, 号は無谷。本貫は坡平。参議の民献の子。1624年, 文科に及第, 槐院から芸文館に入り, 官職は検閲から奉教となり, その後さまざまな官職を経て, 大司憲・礼曹判書に至った。1659年, 孝宗の喪に当たっては殯・葬の両都監を務めた。仁祖・孝祖・顯宗の三代に仕えて, 致仕の後安山に帰って, しばしば朝廷に招請されたが, すべて辞退した。
- 2) 次男の議政公:尹趾善。1627～1704。字は仲麟, 号は杜浦, 本貫は坡平。1662年, 進士として兄弟そろって文科に及第, 説書, 修撰を経て, 1696年, 右議政となり, さらに左議政に転じて, 耆老に入った。
- 3) 三男の東山公: 尹趾完。1635～1718。字は叔麟, 号は東山, 諡号は忠正,

本貫は坡平。孝宗のとき、生員・進士に合格、1662年、兄の趾善とともに文科に及第した。1682年、通信使として日本に行き、帰国後、礼曹判書に昇った。1688年、昀（景宗）が生まれると、肅宗はすぐに王世子に冊封しようとしたので、趾完は大臣たちと時期尚早であると忠言したが、冊封が成って、南人の権大運などが政権を握ると、追われて、京畿道安城郡の東山に下った。1694年、南人たちが追われると、右議政に昇り、南九万・柳尚運らとともに政権を握ったが、老論の鄭澥らの弾劾を受けて、ふたたび東山に帰った。死後、肅宗の廟庭に配享された。

- 4) 六礼の節次：結納などを終えた後、新郎が新婦の家に行き、六つの儀礼をいう。①醮行、新郎が新婦の家に行く。②典雁、新郎が新婦の婚主（多くは父）に雁（今は木製）を渡す。③交拜、新郎と新婦が向い合って拝礼する。④合盃、新郎と新婦が向い合って盃（杯）を交わす。⑤新居、新郎と新婦が同衾する。⑥東床礼、新婦の家の若者たちが集って来て「新郎いじめ」をする。
- 5) 趾慶：この話にある以上のことは未詳。
- 6) 趾仁：『朝鮮実録』肅宗四十四年（1718）五月戊午に尹趾仁の卒伝がある。「前判書の尹趾仁が卒した。年六十三、趾仁は趾完の弟である。もともと才能があったわけではないが、廉恥を知り簡素だという評判があった。しかし、性格ははなはだ陰險で姦邪であり、自己と意見を異にする人間についてはかならず排斥し、陥れずにはおかなかった。李畚を中傷し、権尚遊を陥れた事件を見ても、その心根があますところなくわかる」と、酷い書かれようである。敵対する党派の人物の記述だと思われる。

四十四、オイムルムが語った「三士発願説」

胡瓜をよく茹でて醤油に浸し、生姜を合えて胡椒をふりかければ、十分にやわらかくなって食べやすい。ことに歯の無い老人が食べるのに都合が

いい。人びとはこれをオイムルムとっている。

正祖¹⁾のとき、キムチュンジン金仲真²⁾という人はまだ老いる前から齒が抜け落ちていた。そこで、人びとはからかって、彼をオイムルムと呼んでいた。仲真は諧謔と世間話を好んだが、その話は人情物態を描写するのに微に入り細に入って、往々にして聴くだけのことはあった。その中に、「三士発願説」というものがあった。

むかし、三人のソンビが天に昇って行き、玉皇上帝にそれぞれの望みを述べることになった。

まず一人が次のように述べた。

「名家に生まれて容貌が冠玉のように美しく、五台の車に積んだ書物を読破して科挙には壮元で及第して、華要かつ清顕の職を勤めて才幹が足りないということなく、折衝し輔弼するにあたっては職能を尽し、肖像画が凌雲閣にかけられ、その名を竹帛に伝えられる、それがわたくしの望みです」

玉皇上帝は左右を振り返って、

「さて、これをどうするか」

と尋ねると、文昌星が、

「このソンビは陰徳があつて、世間に現れています。望むような応報があつても不相応ではありますまい」

と答えた。玉皇上帝は、

「それでは、望み通りにしてやるがよい」

と命じた。

次のソンビが話し出した。

「人が貧困の中で生きることほど堪えがたいものではありません。破れた服は身体をおおわず、米糠でやっと腹を満たし、妻は涙を流し、子どもは泣き騒ぐというだけではすみません。飢えと寒さが身に沁み、平常心を保

つことはできません。お願いですから、数万両の金を貯え、年ごとに千斗の粃を蒔く富者にしてください。父母のお世話をし、子どもたちを養育し、兄弟のあいだに心配もなく、冠婚葬祭にあたってその礼を尽くすことができ、貧しい親族や困窮する友人を助け、過客や乞食がやって来て、宿泊し、物乞いすることに対応して、誰もが物足りない思いをしなければ、それでわたくしは大満足であり、他になににも望みません」

玉皇上帝はいった。

「悲しいかな、貧困というものは。大きな望みがそのようなものとはな」

司録に代わりに判決するように命ずると、司録は階段を上って判決を下したのだった。

「お前はよく聞かぬ。お前は前世で富にかこつけて貧しい人を侮蔑し、人の困窮を助けることがなかった。大酒を飲み、女色に耽って、その花々に金と緋緞を費やし、美食もわずかに苦ければ吐き出し、豪奢を愛して、素朴なものを嫌った。妻や家人を難詰して天が下さった万物を乱用して節操がなかった。お前の貧窮というのもみずから招いたものに他ならない。誰を怨むことも、誰を責めることもできないものだ。ただお前の先祖が謙遜かつ儉朴で、義でなければ取るところがなかったから、お前の望みを叶えてやろうが、これはお前ではなく、お前の先祖の応報なのだ」

二人のソンビはすでに退いたが、残った一人は庭の片隅で腕組みをして立ち、ぼんやり遠くを眺めて、何もいい出さなかった。玉皇上帝が、

「お前の望みはなにか」

と尋ねると、そのソンビは顔色を正し、膝を曲げて香机の前に伏して、二度、三度と咳払いをして、はじめて望みをいった。

「わたくしの望むところは、前の二人とは違っています。わたくしは性癖として閑暇を好み、富貴も功名もまったく願ってはいません。ただ河に臨み山を背にするところを得て、三、五間の草屋を質素に建て、数頃の水

田と何本かの桑の木があればよいのです。天に洪水がなく、日照りもなく、土地に税の負担がなく、朝に飯があり、夕べに粥があれば、それで腹を満たすに十分であり、冬に綿入れがあり、夏には葛布があって、それが清潔であればいいのです。それに加えて、子孫たちは職分をまっとうして、苦勞を厭うことなく、奴婢たちも勤勞して耕作と機織りにはげみ、内では厄介な心配ごとがなく、外ではいさかいにまきこまれないことです。わたくしはそこで快適に逍遙して、閑暇に遊び、心に煩うことなく、身体もまた安泰で、天寿をまっとうして、無病のままに死んでいく、それがわたくしの望みです」

そのことばがまだ終わらない前に、玉皇上帝は床を撫でながらいった。

「ああ、それこそ清福というものだ。清福は世の中の人すべてが望むものだが、天がもっとも惜しむもののなだ。もし人がみなこれを求めて、求めて得ることができるものであれば、どうしてお前ひとりがこれを得ることができよう。まず私が最初にそれを得て独り占めして享受しよう。どうして労々としてこの玉皇上帝の地位に留まっていようか」

このようにいったのだった。話がやや当たっていても、世間の紊亂を解決することができるだろうか。いわゆる「オイムルム」という者はたとえ当時の紊亂を解決する業績はないが、口からすらすら出て来ることばが比喩を含んで、よく大事を理解させてくれたのである。

(『里郷見聞録』)

- 1) 正祖:1752～1800(在位 1776～1800)。朝鮮二十二代の王。諱は祘、字は亨運、号は弘齋。英祖の孫。思悼世子の子。母は恵慶宮・洪氏。英祖がその子の思悼世子を米櫃に入れて殺すという惨劇の後、王世孫に冊封され、英祖の後を継いで即位した。党派争いの盛んだった時代で、各党派の均衡をはかる英祖

の「蕩平政治」を引き継ぎ、自室を「蕩蕩平室」と名付けて融和を心がけたが、それでも止まない党派争いに倦んで、政治は洪国栄に任せて、学問に熱中し、王室研究機関である奎章閣を設置し、学者たちを集めて経史の討論に没頭した。編纂事業に力を注ぎ、数多くの書籍を刊行した。悲惨な死に方をした父を用うために水原に城を築いて、世界遺産になっている。

2) 金仲真：この話にある以上のことは未詳。

四十五、安東の賢婦人

金安国¹⁾は、判書であり、かつ大提学でもあった金淑²⁾の息子である。その三、四代前の先祖から文章と才望によって文衡を勤める家柄であった。

安国は生まれたときから、眉目が秀麗で、容貌が端正であったから、父の判書大監はこれをはなはだ愛し、

「これこそまことにわが家の子どもだ」

と喜んだのだった。

しかし、安国がことばを覚えるころになり、父親が文字を教えるようになったが、三か月しても「天」と「地」を理解しなかった。淑は心の中でいぶかった。

「この子はこのように眉目は秀麗で、容貌は優れているのに、どうして才分が欠け、蒙昧なのであろうか。あるいはまだ幼くて、才分を発揮できないのであろうか。数年待って、教えることにしよう」

それから数年が経って、大監はふたたび安国に文字を教えたが、会得しないことは前とまったく同じであった。大監ははなはだ心配になった。

「この子がついにこのように蒙昧であったなら、この子一身の不幸であるだけでなく、わが家の声望も失墜してしまおう」

そこで、昼夜に教えて、しばしば叱りつけた。文字が理解できるように

千万に工夫して教えるものの、安国は「天」と「地」を解することができない。そうして、一月二月、一年二年と経ち、安国も十四歳となった。淑はため息をついた。

「わたしはこの子がまだ幼いからこのようなのだと考えていたが、この子ももう十四歳ではないか。世間でどうしてこのような者を受け容れようか。わが家の先祖の赫々たる名声もこの者によって消え去ってしまおう。祖先を辱める子をもつより、むしろ子がいず、祭祀を絶やす方がましではないか。それに、わたしはこの者を見るだけで、怒りがこみ上げて、心に火がついたようになり、頭が痛くなって仕方ない。このような者をこの家に置いておくわけにはいかない」

こうして、安国の姿を見ないですませる方策を考えたが、それでも殺すには忍びない。また某所に追い出すことも考えたが、それが露見した場合を恐れて手をこまねき、ともあれ、自分の目の前に現れないようにさせた。

そうこうするうちに、次子の^{アンセ}安世³⁾が生まれた。それが五歳になると、容貌の俊秀さは安国には及ばなかったが、その才稟は鋭敏で、安国とは違っていた。安世に家を嗣がせたいと思ったが、安国がいては礼法に背くことになる。いつもどこか誰も知らない遠いところに追いやろうと考えていたが、なかなかそれができずにいた。

そのとき、大監の従弟の^{チヨン}清⁴⁾が安東の通判として赴任することになった。安東はソウルから遠く離れていて、富者も多い。清は王に謝恩肅拜して任地に赴くとき、淑の家に立ち寄った。淑はそこで安国を清に託して、

「この子の素行はかくかくしかじかだ。この子を殺してしまおうと、一日に三度は考えるのだが、やはり殺すのは忍びない。どこかに追いやってしまおうと長いあいだ考えてもいたのだが、追いやる場所も思いつかない。いま、君がさいわいに安東伯となって赴任するという。できれば、この子連れて行ってくれまいか。そして永遠に安東の住民にしてしまって、人

の頭の中からこの子の存在を消し去らせたいのだ」

といった。

清は淑に反対するとともに、慰めながら、

「兄さん、なんてことをおっしゃいますか。昔から今にいたるまで、文章の家に不文の子が一人や二人いなかったことがどうしてありましょう。しかし、それを放逐したという話はまだ聞いたことがありません。兄さんはそれをしようとおっしゃる。安国の人となりは、一見して、このように非凡です。たとえ文字をついに覚えなくても、かならず家業を継いで祭祀を絶やしはしますまい。安世には才知があるといっても、その器は小さく、また次男に過ぎません。どうして安世を安国に替えることができましょうか。兄さんのやり方は倫理に悖ります」

といって、立ち去ろうとした。

淑は清の手を取って留め、

「もし君が私の頼みを聞いてくれないなら、わたしはもうこの世に生きていようとは思わない」

といった。清は引き続き淑の頼みを断ったが、ついに断り切れずに承諾した。淑は安国を呼んで、永訣のことばを告げた。

「今から、わたしはお前をわたしの子どもだとは考えない。お前もわたしを父親だと考えてはならない。二度とソウルに戻って来ることはないようにしろ。ソウルに現れれば殺してしまうぞ」

清は安国を連れて任地に下って行った。清は、安国の容貌はどう見ても凡庸ではなく、教えて理解しないはずはない、自分が一つ教えて見ようと考えた。そこで、役所の書類を見る合間を見つけては、安国を呼びつけて教えるのを日課にしたのだが、三月が経って、やはり「天」と「地」の二文字を理解できない。清もため息をついて、

「なるほど、こういうことか。判書の兄さんはこれでは放逐しようと考え

えたのも無理はない」

といい、従容として、安国にどうしてこう物覚えが悪いのかと尋ねた。すると、安国は、

「わたくしは以前からどんな閑談や世間話を聞いても、精神ははっきりして、昼夜に千言万言を聞いたとしても、ひとたび聞けば、それを記憶して復唱することもできます。ところが、文字にいたってはどういうわけか解することができないだけでなく、文字ということばを聞くだけで、すぐに精神がぼんやりとして、頭が痛くなってくるのです。叔父さんがわたくしを殺すというのなら、わたくしは死ぬだけです。ただ文字については、わたくしはどうすることもできないのです」

清はほどこす術のないのを知って、安国を冊室⁵⁾に帰らせて、ふたたび文章を教えることはなかった。

清はこの邑の座首である李有臣^{イ・ユ・シン}が裕福であり、適齢の娘がいることを知って、安国をその家の婿にしようと考えた。そこで、有臣を呼んで、冊室に男子がいることを告げ、縁談をまとめようとした。有臣が、

「冊室の男子というのはどなたの家の子息でしょうか」
と尋ねると、清は、

「まさに私の従兄の判書の長男なのだ」
という。有臣は家に帰って考えると、疑いが持たげて来る。

「金大監はソウルの歴々とした貴族ではないか。代々に文衡を勤め、国中の両班たちが誰であれ仰ぎ見る方だ。その嫡子といえば、安東などで婚姻する道理がない。庶子なのではないか」

ふたたび出かけて行って尋ねてみると、亡くなった相国の許捐^{ホ・ヨン}⁶⁾の外孫なのだという。歴々とした母親から生まれているのだ。だが、またまた疑問が生じる。

「庶子でもないとなれば、病気もちか、目が見えないか、口がきけないか、

そうでなければ、宦者ではないのか」

またまた有臣がやって来たので、清は花婿が病気もちではないかと疑っているのを悟り、安国を呼んだ。すると、身の丈は八尺を越え、眉目は絵のようで、声音も爽朗として、まことにソウルの美男子である。有臣は心の中で感嘆したが、それでもなお宦者ではないかと疑いが残る。有臣がまさにそれを尋ねようとする前に、清はそれを察して、安国にパジを脱ぐように命じた。すると、立派なものがついていて、宦者などではない。有臣はすでに、男子が庶子でもなく、病気でもないのを知ったが、それならいよいよどうしてと不審に思って、清に尋ねた。

「お従兄の大監はソウルの貴族であり、その子はこのように俊秀でありながら、どうして安東くんだりの千里の外に結婚相手を求められるのか。あえてその理由をお聞きしたいと思います」

清は最後まで隠し通しては、この事は成らないと考えて、文字を介さないために家から放逐されてしまった経緯を明かした。有臣は心の中で考えた。

「安東の座首の娘が現在の大提学の子息を婿にすることができれば、それだけで大満足で、文章をよくするかどうかまで望むことがあろうか。それに放逐されたとしても、わたしが養えば、何の問題があろうか」

ついに有臣はこの婚姻を承諾した。清は有臣の家の裕福ぶりを知っていたから、まったく心配もなく、またその門閥も士族であることを調べてわかり、大いに満足して喜んだ。すぐに吉日を選んで婚礼を挙げた。そうしてしばらくして、清は任期を終えてソウルに帰った。淑に安国の結婚の次第を語ると、淑はみずからの計略が的中したと喜び、清に感謝して、

「本当にうまくやってくれた。うまくやってくれた」
といった。

安国は有臣の家の別棟に入り込み、三か月の間、その庭にも出なかった。

その妻が従容として、

「大丈夫が部屋の中に閉じ籠もって、よくも鬱々となさいませんね。立身出世して名を揚げ、父母に栄光をもたらすことのできるのは、文章にまさるものではありません。今、あなたはこの部屋に閉じこもって三か月におなりですが、まだ書物を読まれるのを見たことはありません。それにしても、お外に出られないのは、いったいどうしてですか」

と尋ねた。安国は顔をしかめて、

「わたしがはじめてことばを口にするようになるやいなや、父親はわたしに文字を教えようとしたが、今現在十四歳になるまで、ついに『天』と『地』の二文字を解することができなかった。それで、わたしを家を滅ぼすものとして殺そうとされ、それに忍びず、この地に放逐し、永遠にわたしが父母の面前に現れることのないようなさったのだ。わたしはまことに罪人なのだ。なんの面目があって天の日を仰ぎ見ることができようか。わたしはただ文字を解さないだけではなく、『文字』の一言を耳にするだけで、頭の骨が砕けそうな気がする。これから以後、わたしの耳元でけっして『文字』ということばをいわないでほしい」

と答えた。

新妻はため息をついて出て行った。

もともと、有臣はすこぶる文名があり、郷里の人びとに称賛されていて、二人の息子もまた文章をよくした。しかし、安国の事情を聞き知って、当初から、文章を教えようという気持ちもなく、また対面することも稀であった。

新婦は長生した男子が何もすることなく過ごしているのが気の毒で、ある日ふたたび夫に、

「わたくしの父兄はみなよく文学に堪能です。あなたも舎廊に出て学ばれてはいかがでしょう」

と声をかけた。安国は声を荒げて、

「すでにいったではないか。わたしは文字ということばを聞くだけで、頭が痛くなるから、わたしに向かってもう文字のことについてはいうな、と。どうした今また、文章を学べなどというのだ」

と叱りつけて、本当に頭が痛くなって臥せてしまった。

妻は無然として退出してしまった。そして、本当に頭痛がするのを知って、もうなにもいわなかった。

この妻の李氏というのは、女子でありながら、なかなかの文章家であり、詩書六芸の文および諸子百家の語に通じていないものがなかった。しかしながら、その天性は温和であり、また事理をわきまえてもいて、文章が女子の身で従事するものではないと考えて、人には隠していた。そのために、かつて人前では文章について口にせず、父母兄弟も、この女子が文章をよくすることを知らなかった。

新婦は夫の安国が父親に罪を得たことが恨めしく、それを晴らしたく、安国に文字を教えたいと考えた。しかし、女子のみで男子に文字を教えるという礼はなく、かつ安国は文字の話を聞くだけでも嫌っているので、どうすることもできない。そこで、物語をしてみても、安国の才稟がどれほどあるのか試してみようと考えた。そこで、安国に尋ねてみた。

「人は石仏でもなく、木偶でもなければ、一日中口を閉ざして何も話さずにいられるものでしょうか」

安国が、

「わたしも話したいとは思うのだが、いったい誰と話せばいいのだろうか」

と答えると、妻は、

「わたくしといっしょに昔の物語でもなさいませんか」

ともちかけた。安国が、

「それは面白そうだ」

というので、妻は天皇氏⁷⁾以来の歴史を解説しながら語って聞かせると、安国は熱心に耳を傾けて、はなはだ興味をもったのだった。そうして、一巻をことごとく解説しながら語り終えと、妻は、

「このような閑談・説話というもの、忘却に任せるものでもありません。わたくしのために、一度暗誦していただけないでしょうか」

といった。安国は、

「それじゃ、そうしよう」

といって、妻の説き終わったものを暗唱して見せたが、すると、どこ一つとして間違うところがない。妻はびっくりしてしまった。

「この人はとんでもない才能の持ち主のようだ。今まで桎梏があって、その発露を阻んでいたのだ。わたくしがこの聰明さを活かして通達するようにお手伝いしよう」

それから、昼夜にともに物語をして、それをことごとく暗誦させた。最初は歴史の話から始めて、最後には聖經賢伝に到るまで、千言万語で暗誦できないものはなかった。ある日、安国が李氏に尋ねた。

「お前とわたしが暗誦しているのはいったい何の話なのだ」

李氏がそれに対して、

「これが他でもない、『文』というもののなのですよ」

というと、安国ははなはだ驚き、かつ訝しんで、

「ほんとうにこれは『文』というものなのか。『文』というのはなんとも滋味があるものだなあ。わたしはこれまでどうして頭が痛くなったのだらう」

といった。妻が、

「文というのは本来、滋味のあるものなのです。どうして頭が痛くなるものですか」

というと、安国はいった。

「それなら今後、わたしは、前日の文字というものを学んでみようではないか」

妻は『十八史略』の初巻を持ち出して来て、天皇氏以下、一つの文字ごとに指差して、前に暗誦したところがどこのところに当たるかを教えて、そして読ませた。それから二巻、三巻とことごとく読ませてみると、すべて理解することができた。安国はこうして今まで理解できなかったことが、一朝にして理解できるようになった。それから、いささかも怠ることなく、昼は食事を忘れ、夜は睡眠を忘れて、日々に読書して、ことごとく暗誦していた書物を読み終え、書齋に積み上げられていた書物をことごとく読破した。妻はまた文字の書き方を教えた。安国も熱心に熟慮しながら、見習いながら文字を書くと、精神が雲のように生じ、妙法が水のように流れ出て、短歌に長文、草書に楷書すべてが備わるようになった。

李氏はまた安国を外出するよう促した。

「『論語』に『徳は孤ならず、必ず隣有り』とありませんか。文章と道徳は、その理知は別ではありません。あなたは十年のあいだ孤立して、朋友と交わることなく過ごされましたが、これからは舍廊に出て行き、切磋琢磨の利益をお受けになったらいかがでしょうか」

安国は沐浴して衣冠をととのえ、出て行って、岳父の有臣に挨拶した。もともと有臣は娘が文章をよくすることも知らない。ましてや娘が安国を教えて文章を成就させたことなど想像もつかない。安国が別堂に閉じ籠もってすでに十年余りが経っている。それが初めてやって来て拝礼をするので、半ば驚き、半ば喜び、その二人の息子もかつ驚き、かつ怪しんで、

「今夕はいったい何があるというのだ。金郎が舍廊にお出ましになったのは」

と尋ねた。安国がこれに対して、

「あなた方は文章をよくなさるとかかっています、わたくしも仲間に加えていただきたいと思いますって来たのです」

という、皆は笑い出して、

「それは以前は聞かなかったことばだ。その気持ちは尊くて称えなくてはならない。やってみてはどうだろう」

といって、題目を粉板⁸⁾に書いた。安国は題目を見てすぐに筆を執り、一篇の文章を書いて差し出した。その文辞は豪放で、筆法は精巧である。みなが大いに驚き顔色を失った。

「これはいにしえの手法であり、安国がこれを成したというのは大変なことだ」

有臣は転倒しながら奥に入って行き、その娘を呼んで尋ねた。

「金郎が文字を解さないと、わたしは聞いていた。ところが、今、ためしてみると、にわかにな文が名筆でもって書かれて来た。これはいったいどういうことなのだ」

娘は膝まづいて、その前後の経緯を話した。家中の者が感嘆して止まなかった。

それからというもの、安国の文章と才業とは日就月将（日進月歩）で、嶺南の老師や宿儒といえども、彼の右に出るような人はいなかった。このときに当たって、国家では王子の誕生を慶祝する臨時の科挙を行うことになった。李氏は安国に勧めて、

「今回の慶祝の科挙には全国の文章を学ぶソンビたちが競って応試します。大丈夫としてすでに文章を学び、大いに成就なさいました。この好機をむなしく逃して、どうして安東の逸民として過ごされますか。あなたがご両親に放逐されてこの地に來られたのも、ただ文字を解さないという理由だけからでした。いまや文辞を理解して、前日とは大いに異なります。お願いですから、あなたはこの機に乗じてソウルに戻られるのがいいかと

思います」

安国はため息をついて、涙を流しながら答えた。

「わたし自身もまたどうして鬱々としてこの地に居続けたいと思っていないか。わたしが初めてこの地に下るとき、父上はわたしに『ふたたびソウルに戻って来たなら、お前を殺す』とおっしゃった。しかし、わたしがどうして死を恐れてソウルに戻らないということがあろうか。ただ、父上に子ども殺しの汚名をお着せしたくないのだ。帰りたくても、どうして帰れようか。それに、人の子として父にその罪を得れば、部屋の扉を閉じて首をすくめて謹慎して身を終えるしかない。どうして安然と科挙の試験場に赴き、王さまに仕えることを願うことができようか」

妻はそれに対していった。

「大義はまさにおっしゃる通りです。しかし、目的が正しければ手段を問わない権道というものもあります。あなたが科挙の場に赴き、金榜に名前を掲げれば、文字を解さないという汚名を雪ぐことができ、しかる後にご両親に見えれば、どうしてご両親がお赦しにならないでしょうか」

安国は李氏のことばももっともだと思い、すぐに科挙のために出発した。千里の長旅を馬一頭と奴一人を連れてとぼとぼと行った。なんとかソウルにたどり着いたが、その家に帰ろうとしても、父親が怖くて仕方がない。そこで、よそに行こうとするのだが、もともとソウルの街を出歩いたことがない。あちこちと彷徨してため息をつき、いっそ安東に戻ろうかとも思い、あれこれと考えながら、乳母のことを思い出した。馬に鞭打って、乳母の家を訪ねて行くと、乳母は安国がやって来るのを見て、驚喜して門を出て来た。手を取って迎え入れていった。

「わたくしは書房さまはもうてっきり亡くなったと思っていましたよ。こうして生きてまたお会いできるとはどうして思ったでしょう。しかし、大監がもし書房さまがソウルに戻って来たとお知りになったら、かならず

大事が出来いたしました。とりあえずあの洞房に入って、人に見られないようにいたしましょう」

夜になって、乳母はひそかに訪ねて行って、安国の母親に告げた。

「安東の書房さまがこの乳母の家にいらっしゃっています」

母親は女親として安国を見送って後は、安国のことを思って泣かない日がなかった。それがソウルに戻っていると聞いて、転倒せんばかりに、出迎えに行きたいと思ったのだが、相公に知れてしまうのも怖い。そこで、乳母にはひそかに、相公が寝入ってしまっ後、安国を連れて来るようにいった。乳母がそのことば通りにして、母と子は初めて相見えることができた。夫人は泣きながら安国にいった。

「わたくしはお前と一別以来、消息があゝの世とこの世を隔てるように途絶して、門の外に出ては、はるか遠くの雲を眺めて、腸が寸々に断ち切られるような思いで過ごしました。いまはお前の顔を見て、悲喜がこもごもに生じます」

安国が夫人を仰ぎ見ると、顔色は蒼白く頭髪はすっかり白くなって、すでにかつての容貌ではない。安国も胸を撃たれ、涙を流しながらいった。

「わたくしはまことに不肖の子で、父上に対して罪を得て、久しく地方に放たれ、母上にも哀しい思いをさせてしまいました。これがどうして人の道といえましょう」

まさに、そのような話をしていると、外に履の音がする。夫人は弟の安世がやって来たのを知って、声を低めて、

「お前の父さんがお前が来ていることを知ったなら、きっとお前を殺しておしまいになる。お前の弟にもお前の姿を見せるわけにはいかない」

といって、安国を部屋の片隅にやって布団をかぶせた。安世が扉を開けてやって来て、それを見つけ、

「その蒲団をかぶっているのは誰ですか」

と尋ねた。夫人は隠し通せないことを知って、安世に座るように命じ、声を潜めて、

「これはお前の安東の兄の安国です」

というと、安世は驚きながらも、手を打って笑い、

「それは本当ですか。安東の兄さんがここに来ていらっしゃる。先ほど、お父さんが夢に安東の兄さんが出て来て、ひどく頭痛がするとおっしゃっていたので、わたくしはそれをお母さんに申し上げようとやって来たのですが、そんなことがあるのですね。安東の兄さんがここに来ているとは」といった。夫人は口をおおって、安世を制止し、

「お前の父親がこのことを知ったなら、きっと大変事が起こる。お前は出て行っても、けっしてこのことを口にしてはならない」

といった。安世はもとより安国の事情というのを聞き知っていて、父親が本当に殺してしまうかもしれないと思って、ついにこのことは父親に告げなかった。

安国は母親に暇を告げて、乳母の家に戻った。翌日は科挙の日である。安国は試験場に行こうとしたが、十年余りも家を離れ、ソウルに上って来たばかりで、四方にうとく、どこが試験場かわからない。ただ一人で上京して来て、いっしょに科挙を受ける友人もいず、うろうろとして途方に暮れていると、まさに一人の青年がきちんとした身なりで試験場に向かってるのが見えた。乳母が、

「あの青年の後についてお行きなさい」

というので、そのことば通りに、その青年について行った。その青年というのは、実は弟の安世なのであった。試験場にたどり着くと、安世の同接(受験仲間)というのはみな宰相の子息たちである。安世は安東の兄が文字も解せずについて来たのを知って恥ずかしく思い、あるいは誰かと尋ねられれば、兄とはいわず、田舎の客人だと答えることにした。

題が掲げられると、それが策問であった。たがいに紙・筆・墨をもって、大騒ぎして走り回り、先を争って題を書き写す。安国は空手で出て来て、しばらく見て口ずさんでもどって来ると、背中を向けてわずかに考え込むと、やおら試券を開いた。墨を磨って筆を振るうと、一度だけ読んでみて、一番に試券を提出した。安世はひそかに驚愕した。

「誰が安東の兄さんは文字を知らないといったのだ」

試験場の門が開くと、安国は乳母の家に帰って行った。

試験官が考査を終えてみると、壮元（首席）は金淑の子の安国であった。友人の子弟が壮元で及第したのを知って、それを祝おうと人びとが門前にやって来る前に、新来（及第者）に出て来るように招請した。淑は当然のこと、それを安世の及第だと思って、喜んでその招請状を見ると、なんとそこには十年も前に放逐した安東の安国の名前がある。淑は驚くとともに、にわかに怒りを発していった。

「あいつめは安東に蟄居していなくてはならないはずが、その分数もわきまえず、父親の命に背いてソウルに出て来ただけでも、その罪は万死に値する。のみならず、あいつは及第したというが、誰かに借作借筆したものに違いない。金淑の家に借作して及第した者が出たとは」

その場で撲殺してしまおうと、奴たちに号令した。

「すぐに安東の奴を捕まえて来るのだ」

安国は蒼ざめて連れて来られ、庭前に跪いた。淑は一言も問うことなく、奴たちに命じて重い杖をもって打たせようとした。そのとき、試験官がみずからやって来て、

「新来はどこにいますか」

と尋ねると、淑は、

「今まさに打ち殺そうとしているところです」

という。試験官はおどろいて、

「いったい何をおっしゃるのか」

と尋ねると、淑はいう。

「かくかくしかじかなのです」

そこで、試験官は、

「そんなこともあろうが、まずは借作であったかどうか確かめるべきであらう。その後は随意になさるがよい」

というと、淑は冷笑して、

「とんでもないおことばだ。こいつめは十四歳のとき、ついに「天」と「地」のに文字を解さなかった。その後の十年で、どうして科挙の文章を書けるようになっていよう。人に代作させての及第なのは間違いない。試してみる必要もない」

といって、すぐに杖で打つことを命じた。試験官もそれを留めることができず、みずから堂から下りて、安国を抱きあげて守った。淑は試験官に怒りを発し、

「わたしがわたしの子どもを殺すのに、どうしてあなたがしゃしゃり出て来るのか。それに、わたしはそいつを見るだけでも頭痛がするのだ。アイゴー、また頭が酷く痛い」

といって、蒲団をかぶって突っ伏してしまった。

安国はその父の怒りを解くのが難しいのを見て、自分自身も死ぬことになるかと息を殺してうつ伏している。試験官が、

「もし、しばらく身体を起こして、わたくしの問いに答えなさい」

といって、

「今回の科挙の題を覚えているか」

と尋ねた。安国は身体を起こして、科題を一字の違ひもなく暗誦した。淑が臥しながら聞いていると、「天」と「地」の二文字も解さなかった人間が科挙の題をすべて諳んじているではないか。はなはだ殊勝だといわねば

ならない。怪訝に思っていると、試験官がまた、

「今回、君が作った策文を記憶しているか」

と尋ねると、安国はまたみずからが作った策文をすらすらと誦んじたが、その文章はまさに無辺の大海に波濤が起こり、千里の長途に駿馬が駆ける勢いである。

淑は聞き終えると、起き上がって安国のところに行き、手を取っていったのだった。

「これは夢か、うつつか。お前にこんな文章が書けるとは。十余年のあいだ他郷の燈火の下でソウルへの懐かしい思いに堪えたのだな。ああ、われらの先祖の赫々たる名声がお前によってふたたび甦ることになる。わたしが思っていた頭痛も今の朗々と文章を読む声ですっかり治ってしまった。父と子はたがいに善を責めることはなく⁹⁾、子どもを教えるのは他人がいいという昔の人のことばはまさに至言というべきである」

安国は膝まづいて自分が文章ができるようになった始終を語った。淑は手を打って大喜びして、下僕たちに、

「すぐに轎子を用意して安東に下り、新婦をお連れするのだ」

と命じ、試験官を振り返って、感謝した。

「賢明な貴君がいなければ、わたしは文才のある子をあやうく殺してしまふところだった」

清が外で、安国の消息を聞きつけて、転倒しながら駆けつけて来た。そして、安国の文章を手にとって読むと、まさに稀代の文章ではないか。

「いったい誰がこのように教えてくれたのだ」

と尋ねると、

「わたくしの妻が教えてくれたのです」

と答える。

清は淑を見上げて

「兄上、わたくしたち兄弟が教えようとして教えられなかったことを、安国の妻が教えたというのですな。堂々たる大丈夫が一介の女子にかなわなかったとは」

としきりに嘆賞した。

李氏がソウルに上って来ると、淑は宗族や賓客を招いて盛大に宴会を催していった。

「わたしの長男が文章を作成して、先祖の遺業を継いで光り輝かせることができたのは、すべて嫁の功績なのです」

みなも称賛してやまなかった。安東にこのような賢婦人がいると誰が考えたであろうか。

李氏は夫の家に入っても、舅と姑によく孝行し、婦人の道理を尽しながらも、それを誇ることはなかった。舅と姑はいよいよこれを愛してやまなかった。

安国の文名と才望は日々に高まり、翰林・玉堂を始めとして、終には大提学に昇った。

（『東廂紀纂』¹⁰⁾）

- 1) 金安国:朝鮮史上、実際に金安国という人物がいるが、この話の金安国は虚構の人物かもしれない。念のために史上の金安国について、その生没は1478～1543。字は国卿，号は慕斎，本貫は義城。趙光祖・奇遵などとともに金宏弼の弟子として至治主義儒学派を形成した。1503年，文科に及第，弘文館博士となり，礼曹参議となった。慶尚監司であったとき，すべての邑の郷校に『小学』を配って学ばせ，農書・蚕書を配布して教化作業に力を尽くした。1519年，己卯士禍が起こると，趙光祖一派として殺されるのを免れ，京畿道利川に下って後進たちの教育に当たった。1532年，復帰して左賛成・大提学などを歴任した。

- 2) 金淑：『朝鮮実録』世祖元年（1455）十二月に、行県監の金淑の名が見え、成宗六年（1475）三月癸亥には、丹陽郡民の金呂生が郡守の金淑に憤って撲殺し、木工が淑のために棺槨を作ろうとすると、死体は簾でつつめば十分だといったという記事がある。これは大提学の金淑とは別人であろう。またこれとは別に成宗十二年（1481）十月癸卯朔の壬寅に、武科を行い金淑ら七人を取ったという記事がある。さらに、中宗二十四年（1529）十一月壬子、献納の尹豊享が、金淑が越江追捕を主張したとして許されるべきではないと上疏している。この武人の金淑も大提学とは別人であろう。
- 3) 安世：『朝鮮実録』中宗七年（1512）三月戊午に、金安世を博士となす、とあり、また中宗十一年十一月己亥に、金諶に後裔がいなかったので、三寸の姪の金安世を養子と見なし、諶の祭祀を行わせた旨の記事がある。
- 4) 清：『朝鮮実録』燕山君日記十年閏四月癸未に、前囚の内官の金清を杖百に処したことが見え、その後も何か所かに金清の記事が見えるが、別人であると思われる。
- 5) 冊室：守令の子弟。または子弟および客人が居住する部屋をいう。地方官の秘書業務を行う人をいうこともある。
- 6) 許捐：この話にある以上のことは未詳。
- 7) 天皇氏：『史記』に「天地がはじめて成立したとき、天皇氏があつて、王位についたのは十二人である。みな無欲恬淡でなんら作為するところはなかったが、その徳のために民俗はおのずから化せられた」とある。
- 8) 粉板：胡粉で書く板。文字を練習するのに使う。
- 9) 父と子はたがいに善を責めることはなく：斉の都の人の匡章は父親の怒りにふれて都城の人はみな不孝者と見なしていたが、孟子はこれと交遊し、尊敬していた。孟子がいう、「それ章子は、子と父と善を責めて相い遇わざるなり。善を責むるは朋友の道にして、父と子と善を責むるは、恩を賊うの大なるものなり」と。たがいに善行を求め合うのは友人間のことであり、父子の間で

そんな関係になるのは情愛を傷つけるよくないことであるというのである。

『孟子』離婁篇下にある。

- 10) 『東廂紀纂』：白斗鏞が編んで翰南書林から出版された本。『東廂記』は李徳懋が作った『金申夫婦伝』を李鉦が劇本として脚色したもので、それを前に載せ、後にさまざまな話を類別して付している。

四十六、辺士行の世間話

ビョン サ ヘン
辺士行¹⁾が話したことである。

（一）鷹を放って、妾を自由にした金肅川

嶺南の金肅川^{キム スクチョン}という者は肅川の守令を罷めて故郷に帰り、その後はあえて官につかなかった。家は豊かだったので、二人の若い妾をおき、三羽の名鷹を飼った。管弦を楽しみ、酒を飲み、肉を食らって十年余り、年齢は七十に達した。

ある日、秋風が立って、架け木に止まっている鷹が羽をすり合わせ、その目を見ると、雲のかなたに飛び立ちたいように見えた。そこで、奴僕に命じて縄をほどき、鈴を外して、三羽ともに放たせた。鷹は空高く飛び立って、やがて縹渺としてその姿を消した。

つぎには、中に入って行って、婢女に、二人の妾の化粧道具や装身具をすべて庭に出させ、二頭の馬を準備させ、その馬に妾の化粧道具と装身具を積ませた。そして数百両の金をまたそれぞれに分けて積ませた。二人の妾は向かい合って裁縫をしていたが、たがいに見交わして、理由もわからず、まごついていた。

「お前たちは、わたしの前にやって来て座るがよい」

二人の妾が前に来て座ると、肅川はいった。

「わたしは大事に飼っていた鷹を秋空に放ってやった。そうして、お前たちを見ると、まだ若く、美しい容姿を、奥まった閨房に閉じ込められ、空しく老人の手に拘束されて生きている。どうして風に乗って雲の上に翔ろうとしながら縄につながれていた鷹と異なるところがあるだろう。いま、わたしはお前たちに馬を与え、その馬に荷物を積ませ、また金も積ませた。一家の家産とするに優に足るものだ。お前たちはそれぞれ父母兄弟のいるところに帰って行き、わたしのことなどにも慮ることなく、かならず若い男をしっかりと選んで結婚するがよい。そして男の子、女の子を産んで育て、百年の楽しみを得るようにせよ」

二人の妾は泣いて、なかなか出て行こうとはしない。肅川は奴婢を叱りつけて、妾たちを連れ出させた。妾たちはそれぞれの家に帰って行った。

二人の妾の家の者たちが驚きあわててやって来ると、金肅川は証書を書いてやって、嫁入りができるようにしてやった。

肅川は親戚や友人たちとともに酒を酌み交わして楽しみながら生き、六、七年を過ごし、そして死んだ。

(二) 田長福から金を借りて殖やした物乞いの少年

平壤城中の田長福^{チヨンチャンボク}は万金を蓄えた富者として、みずからも豊かに暮らし、人に対しても吝嗇ではなかった。金を借りて行く人を帳簿に記載することもなければ、期限内に返すか、返さないかは、その人に任せた。

「財物というのはどうして一人の人間の心のままになるものであろうか。自分の思い通りにしようとしても、思い通りになるものでもない。わたしは空手でもって、このように財を築くことができたが、事をくわだてて失敗したことはなく、多くの場合、予想外の利益を得た。これは要するに、天幸でもって財が集まったので、天がすでにわたしのところに財を集めるのであれば、わたしが我意を立ててこれに手をつければ、きっと天殃が及

んで不利益をこうむることになるであろう。私はどうしてそんなことをしよう」

けれど、長福の闊達さはこのようであったが、しかし、金を借りて返さないという人は十人のうち、二、三人にもならなかった。そして、返すときに利息を加えて返す者が十人のうち、六、七人にもなったから、長福の財は日に日に増えたのである。

ある寒い日のこと、長福が門を出て見ると、一人の少年が夏物の一重の服を着て日差しを乞うようにして座っている。長福が、

「君はいったい何者かね」

と尋ねると、少年は、

「見ての通り、貧しくて物乞いをしているのです。あなたの家で朝ご飯をいただけないだろうか」

と答える。長福が、

「わたしの後について来なさい」

といい、ともに家の中に入っていった。少年を座らせて、食事を食べさせ、食べ終えるのを待って、長福は尋ねた。

「お前の名前は何というのだ」

「呉といいます」

「お前には父や母や、それから妻や子はあるのか」

「そんなものいやしません」

「それなら、この家に住んではどうだろうか」

「あえて、それをいい出さなかったものの、もとよりそう願いたいものです」

長福は下僕に湯を沸かさせ、少年に沐浴をさせた上で、新しい衣服を与えて着せた。

ある日、長福は呉少年に尋ねた。

「お前は商いの術を知っているだろうか」

「よく知っていますよ」

「元手がいくらあれば、商いができそうか」

「まず五千金で試してみましょう」

長福はいわれるままに白金（銀）五千両を渡した。呉少年は旅装をととのえ、暇乞いをして、いった。

「明年の某月某日に帰って来ます」

果して、呉少年は約束したその日に帰って来て、白金一万五千両を積み上げて見せ、

「今日はまさに去年約束した当日です」

といった。長福は、

「そうだったかな。わたしは覚えていなかった」

と答えた。呉少年は、

「わたくしは自分の能力を試してみましたが、二万両の金を動かすことが出来そうです。今度は白金二万両を貸してもらえないでしょうか」

というので、長福は請われるままに白金二万両を渡した。呉少年はまた、

「明年の某月の某日、こちらに帰ってまいります」

といい、長福は今度は壁にその日を書き記した。

はたして、その約束の日、呉少年はやって来て、六万両の金を納めたのだった。長福が、

「君はまた商いに出たいか」

と尋ねると、呉少年は、

「大きな利益はそうそう得ることができないものです。また商いの旅に出れば、今度は大きな災害に遭いそうです」

と答えた。長福は、

「その通りだ」

といい、自分の娘を与えて、婿にして、六万金をそのまま与え、平壤に居座ったまま財を運用させた。呉少年は長福をさらに富ませ、この富は子孫に受け継がれ、一家はいよいよ繁栄した。

（三）隣家の賢い少女を見て心を入れ替えた嫁

杆城^{カンソン}に一人の寡婦がいた。姑に仕えて孝養を尽したが、一人娘がいて、八歳だった。家は貧しく、油を売って生業にしていた。

寡婦がたまたま外出していたときのことである。姑は老いて目が見えなくなっている。油の壺^{しびん}を尿瓶とまちがえ、外にもって行って、消し炭の上に注いだ。まだすべてを注ぎ終える途中で、八歳の女の子はそれに気づいたが、黙ったまま一言も発しなかった。すでに尿瓶を空にして、姑は部屋に入ったが、寡婦が帰って来ると、女の子は戸口で母親を待ち構え、泣きながらいった。

「お婆さんは可哀想。目が見えずに、油壺と尿瓶の区別もつかないの。二つが並べて置いてあったものだから、油壺の油を捨ててしまったのよ。わたしは途中でそれに気が付いて、それは油壺だといおうとしたけど、お婆さんが自分の失敗を悔やんで恥ずかしい思いをしちゃいけないと、黙っていたの。できれば、お母さんも、油壺の油を捨ててしまったことはいわないでね」

寡婦はわが娘の背中を抱いて撫でながら、

「お前はわたしの娘だね。ああ、いい子だ、いい子だ。どうしてそんなに早く智慧がついたのかしら」

といった。

その隣の家には不孝な女が住んでいて、たまたま垣根の隙間から、寡婦と女の子のやり取りを盗み見していて、大いに感じるころがあった。家の中に入って、姑にいった。

「今日からは仕事をせずに、ゆったりと座って過ごしてください。薪を運んで火をつけたり、灰をまいて犬の糞を片づけたり、赤ん坊の世話をしたりなど、すべてもうやめてください。また、蚕に桑をやったり、器を洗って鍋の煤をこすったり、竈の灰を捨てたり、庭を掃いたり、麻を績^うみ、綿くずをひろったりなども、もうしないでください。このいたらない嫁がなにをいっても、心配しないでください」

姑は涙を流しながら、すっかり白髪になった頭を掻きながら、

「あなたはいったい心の中に何が起こって、このような非情のことは吐くのか。爺さんや、爺さんや、どうしてわたしをあの世に連れて行ってくださらぬ。この嫁は日に日にわたしをさいなむのに」

その女子はふたたび膝を屈するというのだった。

「このいたらぬ嫁はこれまで横暴で、婦道を踏み外していました。今日、たまたま感悟するところがあって、このようなことをいうのです。お義母さまは安心なさって、心配なさらないでください」

夕方になって、夫が帰って来ると、妻は自分が改心したことを夫に告げたものの、夫は怒りだして、

「今日もまたお母さんに悪口雑言を吐いていじめたのだな。お前が何年もお母さんに横暴に振る舞い、お母さんには寸時も気持ちの落ち着く日がない、今日はにわかになんか風の吹き回しで、そんなことをいうのだ。きつと、ねじけた言い回しをして、恐ろしいことを仕出かしたのだな」といった。妻があらためて、

「今日、たまたま東隣の家の寡婦と八歳の女の子のやり取りを見たのです。かくかくしかじかのことがあって、かくかくしかじかの話をしていました。彼女らも人であり、わたくしもまた人です。寡婦は姑に対して、女の子は祖母に対して、孝行の極みを尽しています。わが身を振り返ると、お姑に対する振る舞いは無惨としかいいようがありません。八歳の女の子

の振る舞いを見て、どうして恥じずにいられましょう。わたくしは心に誓って、今までの過ちを改め、前日のような凶暴な振る舞いのないようにするつもりです」

というと、夫は、

「そうだったのか、しかし、それがお前にできるかな」

といった。

そうして、七、八か月が過ぎたが、その妻の孝心が衰えることはなく、姑によく尽した。姑も安心して日々を過ごせるようになった。夫ははなはだ喜んで、酒を醸し子牛をほうって、近隣の人びとを招いて盛大に宴を催した。東隣の寡婦と八歳の女兒も招いて、大きな卓にご馳走を並べ、二人の前に進め、これまでの成り行きを話した。

「わたしは妻を娶って、最初はその性質が凶悪であることを知りませんでした。世間では、女は子どもを二、三人産んで、その本性が現れるといいますが、はたして数人の子どもを産んだ後、凶暴な性格を現して、老母を虐待し始めました。それなのに、どうしてこの妻を追い出さず、母親を安楽に暮らせなかったのかといえば、子どもも多かったし、家政はつつがなく保持したので、追い出すことができなかったのですが、心中では讎仇に対するようで、いささかも家庭の楽しみを味わったことはなく、つねに不孝の恥を抱えていました。ところが、隣家の賢母子の徳化によって、凶悪な性質が変じ、妻は不孝の汚名を免れることができ、老母の余生も平安に送ることができるようになったのです。ほんのお口汚しですが、あえて感謝の意志を示す次第です。ご遠慮なく、お召し上がりください」
郷党の者たちもしきりに感嘆して、帰って行った。

（四）叛奴を推尋する

ある困窮したソンビが湖南の海岸に叛奴の推尋²⁾に出かけた。叛奴の一

族は繁栄して、産業も振るっていた。

彼らはソンビがやって来ると、始めは歓待して、美しい処女を枕席に侍らせた。ソンビは喜んで、叛奴たちを深く信頼した。

しかし、とある夕べ、その女子はチマを脱ぎ捨て、房の戸を閉ざして、みずからの髪の毛を櫛削って男の髷を結び、ソンビの髪を梳って逆に女の髷を結った。ソンビがいぶかしく思って理由を尋ねると、女子は泣きながらいった。

「今夜、変事が出来します。父と兄たちは私に難を免れさせようとします。ですから、あなたは私の服を着て、変事が出来したら、逃げてください。籬の隙間から逃げて走るのです。そして役所に告げれば、役所は人を出して、賊どもを捉え、かならず賊どもを誅殺することになるはずです。そこで、お願いします。私はあなたに代わって死ぬのです。ですから、父の命は救ってください。兄や親族の命をまで救うことまでは、あえてお願いしません」

はたして、その夜半、十人余りの男たちが刀を振りかざして、部屋の戸を蹴破って押し入って来て、髷をつかんで引きずり出した。外の庭で飼葉切りで首を切り、死体を俵で包んで、海まで運んで投げ捨てた。

ソンビは女の服を着て内庭に飛び出し、後の籬の隙間から逃げ出した。そして衣服を改めて、県監に変事を告げた。県監は大いに驚き、すぐに吏卒を発行させ、叛奴たちを捕縛させ、拷問を加えさせた。その女子の父兄ははたして賊の一味であった。ソンビが女の遺言を伝えて、県監は特にその父親だけは赦した。父親には、娘の死体を探して葬るようにいったが、父親は号泣して地面を叩きながらいった。

「これを切って土塊のように俵に詰めても一斛にも満たず、それで大きな石を縛り付けて、海に放り棄てたのです。どこを探せばいいというのですか」

県監はつぶさにこの変事を観察使に報告した。観察使はまた王さまに報

告して、叛徒たちを死刑に処した。その女子については、孝女・忠婢・烈女の三つの行実を具備しているとして旌閭門を建てた。

（『雪橋別集』）

- 1) 辺士行：『雪橋別集』の作者の安錫徹と親交のある友人の一人らしいが、どのような人物かは未詳。
- 2) 叛奴の推尋：叛奴は奴婢身分から逃亡し、あるいは主家に貢納を怠っている奴婢をいい、それを推尋するというのは主家筋の者が主－奴関係を証明する券をもって示し、未納分を徴収することをいう。朝鮮社会の身分制の厳しさと、それに反抗しようとする奴婢の姿がここでは語られている。ただしこの話をした辺士行も筆者の安錫徹もあくまで兩班階級、すなわち奴隷の所有主であり、搾取する側の立場にある。

四十七、官奴から取り立てられて護国の英雄となった鄭起龍

鄭起龍¹⁾ チョン キ リョンというのは尙州の人である。晋州に赴いて、兵營の官奴として名簿に登録された。ある日、兵營の庭で昼寝をしていて、寝ぼけて大声で叫んだので、兵相がこれと呼んで叱りつけた。

「お前は どうして 兵營の庭で 惰眠を むさぼり、寝言まで いうのか」

起龍はこれに答えていった。

「わたくしの身はたとえ賤しくとも、抱負は雄大です。大丈夫が人となって、なんら手柄を立てず、鬱屈した心を抱えていて、眠っていても叫ばずにはいられなかったのです」

兵相はすぐに起龍を良民として解放した。

起龍は吏属として仕事をするようになった。衣服は擦り切れていたが、その気概と働きは粗忽ではなかった。

そのころ、全州の首吏²⁾の豊かな家で、父母の愛情を一身に受けた一人娘がいた。婿を選ぶ年頃になって、娘はいった。

「女子の百年の幸せはひとえに夫にかかっています。ひとたび一身を誤まったなら、いくら後悔しても間に合いません。どうして恥ずかしがって黙って座したまま、お父さまとお母さまが花婿を選んでくださるのを待っていられましょう。お父さまは全州の地でもっとも有能な官吏にはちがいありませんが、婿がねがどのような人間なのかを判断する知鑑をお持ちなわけではありません。わたくしはわたくしの目で見えて選びたいのです。たとえ時間がかかったとしても、かならずその人を見つけ出します」

父と母は娘を強制することもできない。荏苒として歳月が過ぎて行くのを焦慮して、いつも娘を咎めていた。

晋州の首吏と全州の首吏はともに結婚適齢者を調べていた。晋州の首吏が起龍を呼んで、全州の首吏に手紙を届けさせた。起龍が手紙をもって全州のその家に行くと、首吏夫婦はたまたま親戚の家に出かけていて、娘がひとり留守をしていた。起龍が門をたたくと、娘は門内から、

「あなたはいったいどこのお方でしょうか」

と尋ねると、起龍が、

「晋州の首吏の使いとして、手紙を届けに参りました」

と答える。娘は耳をそばだてて、その声を聞いたが、どうやら非凡の人のように思える。そこで、門の外に出て見ると、継ぎはぎだらけの衣服をまとったチョンガーである。つらつらこれを眺めて、やや久しくして、

「お父上はすぐに帰って来られるので、あなたはしばらく舎廊の前に座して待っていてください」

といい、また振り返って、

「舎廊の外に座して待っている必要はなく、中門の中に入っても構いません」

といった。

しばらくして、首吏の妻が先に帰って来て、娘に、

「あれはいったい何者ですか。どうして中門の内に入って座っているのですか」

と尋ねると、娘は、

「あの方は晋州の首吏が使いによこした人です。そして、わたくしはすでにあの方と結婚することに決めました。それで、中門の内に入れて座らせているのです」

と答えた。母親は怒りだし、

「お前は両親が婿を選ぶのを許さず、自分自身で選ぶと固執するので、きっと素晴らしい婿を選ぶのだと信じていたのです。ところが、あの継ぎはぎだらけの服をまとった男を新郎に選んだとは。お前の目は節穴か」

といった。娘はきっぱりと、

「お母さん、雑言はやめてください」

といった。

母と娘が言い争っているとき、父親の首吏が帰って来た。妻が夫に娘の意志を伝えると、夫は同じく反対した。娘はいった。

「お父さまの眼力は拙劣で、あの方の本当の姿が見抜けないのです。襤褸をまとっている見かけにまどわされないで、耳目口鼻を子細にご覧になってください。どこに不足なところがあるでしょうか」

父が起龍を子細に観察すると、はたして娘のことは通りだった。父親はいった。

「お前の気持ちがそのように定まったのなら、やむをえない。お前の希望通りに結婚させようではないか」

父親は人をやって起龍を呼んで来させ、家門や凡百の事どもを子細に尋ね、起龍もこれに丁寧に応答した。父親が、

「お前を婿にしようと思う」

というと、起龍は、

「この厳しいご時勢に乞児を婿に迎えようという道理がどこにあるのでしょう」

といった。父親は、

「あなたはこの家に留まり、母親にわが家の婿になったと手紙に書くがよい。わが家の奴がそれを届けよう」

というと、起龍は、

「わたくしがいくら寒微とはいえ、結婚という人倫の大事を、どうして書面だけで母親に伝えて済ませることができましょう。それは子としての道理ではありません。わたくしはみずから行って母親に告げ、そして帰って来ます」

と答えた。

「あなたのいう通りだ。奴と馬を用意して、あなたについて行かせよう」

「わたくしは微賤の人間とはいえ、きちんと脚はついていきます。どうして奴や馬がいりましょう」

「すでにわが家の婿に決まったからには、どうして徒歩で行く必要があらうか」

この家には性質の荒い馬が一頭いた。五、六歳になっていて、人が近づいただけで、歯をむき出し、後ろ足で立って暴れる。秣を与えるときも、長い竿に籠をしぼりつけ、その籠に秣を入れて食ませた。殺してしまうことも考えたが、それもしのびずに飼っていたのである。

娘が父親にいった。

「お父さま、あの方がほんとうに非凡な人間かどうか、試してみましよう。あの荒馬は実は駿馬です。あの馬はあの方が非凡な人間であることを知っているはずです。あの方にはあの馬に乗って晋州に行かせることにしましょ

う」

父親が起龍に、

「あなたはあの馬を手なずけることができるだろうか」

というと、起龍は、

「わたくしはまだ馬に乗ったことはありません。しかし、男子としてどうして一頭の馬を手なづけられないということがありましよう」

といって、秣桶の前まで歩いて行った。その馬は最初、大きな口を開けて、後ろ脚で立って脅かしたが、起龍が馬の頬をたたいて、

「お前は無礼を働くのか」

と一喝すると、大人しく頭を垂れた。起龍が頭を撫でて、身体をさすってやると、馬はおとなしくなつた。娘は大いに喜び、

「馬には人がわかるのです」

といった。

起龍は馬に乗って家に帰り、母親に結婚することを報告して、ふたたび全州にもどって、婚礼を挙げた。舅が起龍に、

「晋州で老母を養わなくてはならないというわけでもあるまい。こちらに来て一生を安楽に過ごしてはどうか」

というと、娘が出て来て、父親のことばをさえぎり、

「この方は晋州の酒幕の門外の乞児でしたが、それでも晋州が故郷です。女子は嫁げば、夫にしたがって生きるだけです。お父さまの万金の財のわずかでも分けていただければ、一人の女子が生きることなどたやすいはずです」

といい、ついに夫婦して晋州に行った。

しばらくして、壬辰の倭乱が起こった。起龍は乱が起こったと聞くと、立ち上って舞を舞った。妻はいった。

「あなたの志が壮大なのはわかりますが、功を立てるなら、まずは勤王

が優先します。すぐにソウルに上るのがよろしいでしょう」

起龍が、

「老母とお前をおいて行くことはできない。どうすればいいのだ」

というと、妻は、

「わたくしとお姑は山中に避難します。お姑はわたくしがお守りしますから、あなたはご心配におよびません」

といった。

起龍は妻と老母を避難させ、全州から乗って来たあの駿馬で駆けて、漢江に至った。そこで招討使に遇って、聞くと、大駕（王の一行）はすでにソウルを去ったという。招討使がともに南方に行くことを請うたので、起龍は同行して、嶺南に下って行った。招討使のために賊の動勢を探って帰って来ると、招討使の一行三十六人は倭賊のために捕虜になって連れ去られていた。起龍は、

「わたしはすでに招討使一行と行動をとともにしている。どうしてわたしひとりがおめおめと生き延びることができようか」

といい、馬を躍らせて、倭賊の陣に突入した。倭賊どもは抵抗することもなく、崩れ去った。そこに縛られていた三十人余りの縄を解いて連れ帰った。倭賊はなすすべもなく、遠くでそれを眺めていた。

起龍は晋州の牧使に勤王兵を起すことを勧めたが、牧使がこれに応じなかったので、起龍はこれを切った。牧使の旗下の軍卒を率い、さらに兵を募って歴戦して、はなはだ多くの倭賊を殺した。わずかの暇を得て、老母と妻のところに行ったが、無事に過ごしていた。その妻がいった。

「清州はいまだ要衝の地として危険ですが、錦山はすでに義兵が立って倭賊を破り、重ねて襲われる心配はありません。わたくしたちを錦山に移してください」

起龍は妻のことば通りに、二人を錦山に連れて行き、ふたたび戦闘に赴

いて、前後の功労は少なくなかった。朝廷ではそれを聞いて官職を与え、何度も栄転させた。

乱が終息するにおよんで、北兵使に昇ったのだった。

（『東稗集』）

- 1) 鄭起龍：1562～1622。字は景雲，初名は茂寿，号は梅軒，本貫は昆陽，贈左賛成の成浩の子。1592年，壬辰の倭乱のとき，防禦使の趙徹にしたがい，別將として出戦し，居昌・金山で敵兵を殲滅した功績で尚州判官となり，さらに戦果を挙げて，尚州牧使兼敢死軍大將となった。1597年，丁酉の再乱のときには金烏山城を守り，高嶺で大勝するなど歴戦の功で慶尚右兵使に昇進し，さらには三道統制使となり，水軍も率いるようになった。
- 2) 首吏：地方の官衛に六房（吏房，戸房，礼房，兵房，刑房，工房）があり，首吏は吏房の長をいう。
- 3) 壬辰の倭乱：日本でいう文禄の役。壬辰の年（1592）に起こったのでいい，さらに慶長の役は，日本では1598年のできごととして扱うが，朝鮮では丁酉の年（1597）のできごととして丁酉の再乱といいならわしている。このときの豊臣秀吉の朝鮮侵略を一括して壬辰の倭乱という場合もある。

四十八，それぞれの科挙

郭天^{クァクチョン}拳^コ¹⁾というのは槐山の校生²⁾である。ある夜，妻と寝っていると，妻がにわかに泣き出した。その理由を聞くと，妻は，

「夢の中で，黄龍が天から降って来て，あなたをくわえ，屋根を突き破って去ったのです。それで泣き出したのです」

といった。天拳がいった。

「龍の夢を見た者は科挙に及第するというが，わたしのように文字も読めない人間がどうするのだ」

朝になると、天拳は田んぼに水を引くために外に出た。道の傍らに立っていると、襟をはだけて急いで行く人がある。いったいどうしたのかと尋ねると、その人は、

「朝廷でにわかにな別試を行うことが決まった。それを慶尚道の某邑の守令のご子息に伝えるために道を急ぐのだ」といった。

天拳は家に帰ると、妻にいった。

「昨夜、お前は不思議な夢を見た。すると、今朝、科挙が行われると聞いた。しかし、わたしは文字を識らない。どうすることもできない」

それでも、妻は天拳にソウルに上れという。天拳は再三それを拒んだが、妻は路銀まで用意して、天拳をソウルに出立させた。

天拳はソウルに着いたものの、王城は初めて足を踏み入れるところだから、どこに行ってもいいのかわからない。崇礼門に入って、最初の洞といえは倉谷である。そこで歩みを止め、荷物を降ろして、ある屋敷の門前で一休みした。すると、その家から人が二度、三度と出て来て見ては、中に入っていたが、最後に主人が中に招き入れるようにいっていることを告げた。

天拳は家の中に入って行って、主人に見え、科挙を受けに来たものの、ソウルは初めてであり、どこにも泊まる当てがないことを告げた。主人はいささかも躊躇することなく、天拳を家に泊まらせ、試験場にもいっしょに行くことにした。この主人というのは李上舎といい、宿儒といっていい人で、科挙を受け続けて年老いてしまった人であった。科挙におもむく荷物の中に文章の草稿の巻軸が積み重なり、試験場には、天拳にこれを背負わせて入り、科題が出ると、それと同じ題目の草稿を出させるようにした。天拳は校生として文字をわずかに知るだけで、切れ切れに理解できるだけである。李上舎は自分のものを書き上げて出て行って、天拳が始めて上舎の草稿をよく見ると、科題と同じ題目のものが何篇もあり、たがいに似通っ

ているものが多かった。天挙は適当に継ぎはぎして一篇をでっち上げ、天挙自身の作として提出したところ、李上舎とともに解額³⁾に参加することができたのだった。

天挙は大いに喜んで、すぐに帰って行こうとした。

「わたしはこれで軍役を免れることができる。及第したのと変わるところがない」

李上舎が彼を引き留め、会試⁴⁾も受けるようにした。やはり前と同じようなやり方だったのだが、李上舎は落第して、天挙は及第した。

天挙は質朴な人物で、科挙の実際を包み隠さず人に話してくれた。官職は奉常寺正⁵⁾にまで至った。

李日躋⁶⁾は当時名声のあるソンビであった。駢儷文をよくして、眼識が高く、彼が認定する人は間違いないとされた。

ある日、日躋が科挙の試験場に赴いたものの、同接を見失って狼狽し、頒題板の下でうろついていた。すると、傘が五、六本開き、灯りをともし、帳を垂れて、豪奢に設けられた場所があり、珍味佳肴が用意されている。日躋は気になって中に入って見ると、毛氈を重ねて敷いた上に座っている一人の少年の秀才がいる。横には十数名の書生がおのおの試券をもって輪になって座っている。皆が秀才の口から出る文章を聞いて、それを書き写すのだが、秀才は左の問いかけに答え、右の問いかけに応じ、すこしも苦渋する様子がない。日躋がうかがっていると、文章を展開する手際は法度にかない、対偶は精緻で、すべて優れた文章である。日躋は大いに驚き、

「この世間にはこのような人物もいるのか。姓名をうかがいたいものだ」というと、秀才は欣然と笑うだけであった。

文章が完成すると、秀才は侍者にそれを提出させた。侍者がしばらくして帰って来て、

「試券は落とされました」

というと、秀才はまた別の試券を与えて、

「それでは次にこれを提出せよ」

といて渡した。侍者が帰って来て、

「試券はまた落とされました」

といったので、秀才はまた別の試券を手渡した。そのようにすることが五、六回、宮中ではまだ日も傾いていなかったが、秀才は大いに笑って立ち上がり、

「幾篇も佳作を書いたが、いずれも選ばれなかった。これも天である。どうしてまた提出しよう」

というと、笠を巻いて出て行った。

日躋が従者に後をつけさせたところ、彼は北軒・金春沢^{キムチュンテク} ⁷⁾であった。

(『破睡篇』)

- 1) 郭天挙：この話にある以上のことは未詳。
- 2) 校生：本来は郷校の儒生のことであるが、朝鮮後期になると、単なる郷校の使役をいうようになった。郭天挙の場合は後者。
- 3) 解額：初試で次の会試を受ける資格を得たこと。すなわち挙子となることを意味する。
- 4) 会試：初試に合格した人がソウルでふたたび受ける科挙。
- 5) 奉常寺正：奉常寺は国家の祭事と諡号に関することを司った役所。奉常寺正はその長官で正三品の官職。
- 6) 李日躋：『朝鮮実録』景宗三年（1723）八月乙卯に李日躋を選拔し、戊寅に李日躋を正言に任じたことが見える。次の英祖の時代には、持平、献納、義州・江界・水原府使などを勤め、英祖十年（1734）六月甲子には、江界府使の李日躋が松江沿岸を周覧して、防御の方略を陳述し、それに基づいて、江辺の六邑および各鎮堡の柵や堡壘の修築を行ったことが見える。英祖二十八

年（1752）十月丁酉には、兵曹參判に至っている。

- 7) 北軒・金春沢：1670～1717。肅宗のときの文人。字は伯雨，号は北軒。本貫は光山，光成府院君・万基の孫。肅宗のときに仁顯王后を廃し，南人が政權を執ると，その禍は春沢の家においてもっともはなはだしく，三十年間にわたって禁獄・流配の生活を送った。文章に抜きん出っていて、『謝氏南征記』を漢訳した。

四十九、本売りの曹生

曹生^{ジョ}がどこの人だかはよくわからない。ただ書物を売って生業として久しかったので，世間の人たちは貴賤賢愚を問わず誰もが彼を知っていた。

曹生は日が出ると，市場に駆け，巷に駆け，書堂に駆け，そして役所に駆けて行って，上は搢紳大夫から下は小学の童子に至るまで，出会わない人たちはいなかった。その駆け足はまるで飛ぶようであった。その懷や袖いっぱい^{イッパイ}に書物を詰め込んで出て，その書物が売れば，金をもって酒屋に駆けて行って，酒を買っては飲んで酔い，日が暮れると，また駆けて家に帰って行った。人びとはその住所を知らず，また彼が食事をしているのを見たことがなかった。ひとえの麻衣に草履をつっかけて駆けて行き，季節が移り，年が変わっても，その姿は変わることがなかった。

英祖^{ヨンジョ}の辛卯の年（1771）のことである。朱璘^{チュリン}の書いた『明記輯略』にわが国の太祖と仁祖を冒瀆することばが書かれていた。中国にその是正を要求する一方，世間に出回ったその書物を回収して焼却し，その書物を売る者を捕まえて殺すこととした¹⁾。当時，国中の本屋がほとんど殺されてしまったが，曹生だけは遠くに駆けて行って，ひとり死を免れた。一年あまりして，曹生はふたたび現れ，書物をもって市中を駆けまわったので，人びとは不思議に思って尋ねてみると，曹生は笑いながら，

「今、わたくしはここにいるではないですか。どこから駆けて来たというのですか」

といった。誰かが年齢を尋ねると、やはり笑いながら、

「忘れました」

といい、あるときには、

「三十五歳です」

といい、今年それを聞いた者が、明年また同じ答えを聞いて、

「どうしてまた三十五歳というのですか」

と尋ねると、

「ははは、人は三十五歳というのがいちばんいい時期で、わたくしは自分の年齢は三十五歳のままに止めて、もう歳は加えないのですよ」

と答えた。一人の好事家がいて、曹生を見て、

「あなたは数百年歳にはなっているのではないか」

というと、

「どうしてあなたは数百年前のことをご存知なのかな」

といった。好事家はこれには答えに窮したが、曹生が酒に酔ってこれまで見聞して来たことを話すと、それは往々にして百数十年前のできごとであった。

人が、

「苦勞して本を売って回るのは何のためなのですか」

と尋ねると、

「本を売るのは酒を飲むためです」

と答える。

「本は全部あなたのものなのか。あなたは本に書かれていることはみな理解しているのか」

と尋ねると、曹生はいった。

「わたくしはたとえ本をもっていなくとも、たとえば某氏があれこれの書物を何年ものあいだ所蔵していたとする。その若干のものを売ったのはわたくしだ。わたくしはその本の意義を解さないが、ある本は誰が書き、誰が注釈を施し、何冊、そして何秩になっているかには精通している。それに天下の書物はみなわたくしの書物であり、天下に書物についてわたくしより知っている者はいない。天下に書物がなければ、わたくしが駆けまわることもないが、また天下の人が書物を買わなければ、わたくしは毎日酒を飲んで酔うこともできない。これは天が天下の書物に対してわたくしに命じたところであり、わたくしの生涯を書物に献じたのである。昔、某氏の祖父と父が書物を買ってその身も栄達したが、今やその子孫は書物を売って、家は困窮するのを見ることになった。わたくしは書物を介して人びとを多く見て来たが、世間には智慧のある人も、愚かな人も、賢い人も、不肖な人もいて、比類従群、生々不息のありさまである。わたくしがどうして天下の書物にだけ通じているだけに留まろう。実は天下の人間についても通じているのだ」

キョンウオンチヤ²⁾ 経畹子²⁾ がいう。

わたくしは七、八歳のとき、はじめて文章を書くことを知った。

ある日、父は曹生から『唐宋八家文』一秩を買い、わたくしに与えて、「あれが本売りの曹生だ。わが家の蔵書はみな曹生から買ったものだ」とおっしゃった。そのとき曹生の容貌は四十歳ほどに見えたが、それからまた四十年ばかりが経っている。曹生はまったく年を取らない。普通の人とは異なっている。そのとき、わたくしは曹生を慕い、曹生もまたわたくしを可愛がって、わが家に立ち寄った。今やわたくしは頭髮に白いものがまじり、すでに数歳の孫を抱えている。しかるになお、曹生は長大な体軀に赤い頬をして、緑の瞳に烏の濡れ羽のような髭をたくわえ、昔の姿と変

わるところがない。不思議なことである。わたくしは曹生に一度だけ、なぜご飯を食べないのかと尋ねたことがある。すると、

「不潔なものを嫌うのです……」

といい、さらに続けた。

「人びとが長生きするために、薬に頼るのはまちがいです。孝行と友愛とを心がけることが陽徳となるのです。あなたは世間の人がわたくしにうるさく尋ねることのないよう、これを教えてやってください」

ああ、曹生は真実に道を得て、隠れて世に住まう者なのではないか。曹生がわたくしに語ってくれたことばは老子や荘子の道というべきものであった。

(『秋斎集』³⁾)

- 1) その書物を売る者を捕まえて殺すこととした：『朝鮮実録』英祖四十七年(1771)五月庚申に、前持平の朴弼淳が、昨日、たまたま中国から来た『綱鑑会纂』を見ていたところ、康熙年間に朱麟なる者の撰した書物に、わが国の王室の系譜に重大な過誤のあることを見出したことを上疏した旨の記事があり、その後、朝廷では侃々諤々の議論になって、王はそのような書物を宇宙に一日でも留め置いては一日の不孝であり、二日留め置いては二日の不孝であるとし、中国の朝廷に焚書毀板を要求することまでが論じられた。同月丙寅には朱麟の著した『明紀輯略』を売買する者、金履復・沈恒らを尋問して処罰することにした旨の記事がある。
- 2) 経晩子：『秋斎集』の作者の趙秀三。生没年 1762～1849。朝鮮後期の閭巷詩人。本貫は漢陽。字は芝蘭、子翼、号は秋斎、経晩、初名は景瀧。その出身は翻訳官として中人だと考えられる。その身分的な制限で、1844年、八十三歳の年齢で進士に合格している。1789年、李相源にしたがって初めて中国に行って以来、前後六度にわたって中国を往来し、中国の文人と交流すると

もに、国内各地も漏らすことなく旅行して見聞を広めて多くの詩文を残している。趙秀三は文学だけでなく、医学にも通じ、博棋と談論を好んだという。

- 3) 『秋斎集』：八巻四冊からなる。翻訳官出身の詩人である趙秀三（1762～1844）の詩文集。広範な見識と新たな文芸の趣向を感じさせる作品も少なくないとされ、一般士大夫たちの文集とは一線を画している。特に第七巻に収録された「紀異」は詩と散文で市井の人の生活と情緒を描く特異な形式を備える。

五十、干し魚売りの賈秀才

賈秀才^カの出自はわからない。いつも赤城県^{ジョクソン}¹⁾の清源寺に出入りして、干し魚を売るのが生業としていた。背は高くて八尺あり、辮髪を結っていて、顔色ははなはだ黒かった。人が姓名を尋ねると、

「わたしの姓は天で、名は地、字は玄黄だ」

と答えたので、聞く者は絶倒した。しかし、しつこく尋ねると、

「わたしは賈^{あきない}をしている。だから、姓は賈氏だ」

といったので、そのときから、賈秀才と呼ぶようになった。

いつも、明け方には起きて、干し魚を担いで遠近の庄園をまわって、日に銅錢五十も得れば、酒を買って飲んだ。平生、ご飯を食べなかった。

清源寺は赤城県の南の辺鄙なところにあった。県の儒生たちが読書のために寺にやって来た。

ある日、大雪が降って晴れた日、賈秀才は雪中を歩いて泥まみれになった足のまま、じかに堂に上がって儒生たちのあいだに座った。儒生たちはこれを見て怒鳴りつけたが、賈秀才は睨み付けて、

「君たちの威勢は秦の始皇帝以上だ。わたしは呂不韋²⁾にも及ばない。ああ、怖い、怖い」

といって、そのままそこに寝転がっていびきをかきだした。儒生たちはいよいよ怒って、僧を呼んで外に引きずり出させようとしたが、賈秀才は重くてそれができなかった。

翌日、仏殿の上で、誰かが李白の「遠別離詩」³⁾を吟じている。その音声は朗々としている。儒生たちがそれを聞きつけて行ってみると、すなわち、賈秀才である。儒生たちは訝しんで、

「あなたは詩を作るのか」

と尋ねると、

「作る」

と答える。

「書もできるのか」

と尋ねると、

「できる」

と答える。

儒生たちが紙筆を賈秀才に与えて、詩を作ってみろといった。賈秀才は狂ったように硯で墨を磨り、左手でいきなり筆を執ると、紙の上に草書で飛ぶようにしたためた。

青い山は美しく、緑の川の流れもすばらしい、その青山緑水の千里の道を、魚を売っては酒を買って行き来する、百年の長きに山中で暮らして年老いる。

(青山好 緑水好 緑水青山千里道

賈魚沽酒婦去来 百年長在山中老)

賈秀才は筆をおいて、呵々大笑して止まなかった。その書体は孤山・黄^{ファン}耆老^{キロ}⁴⁾を彷彿とさせるものであった。儒生たちは賈秀才をはじめて敬い重

んじるようになった。ふたたび詩を作ってくれるよう請うと、大きな声を上げて怒り、ついに肯んじなかった。

ある日、泥酔して河豚を仏前に供え、合掌礼拝したので、僧侶たちは驚いてこれを追い出そうとした。賈秀才はいった。

「君たちは経典を読んだことがないのか。経典には釈迦如来が河豚を召し上がったと書いてあるではないか」

「何という経典にそんなことが書いてあるというのだ」

「『菩提経』にある。私が読んでやろう」

賈秀才はそういうと、仏の前に結跏趺坐してぶつぶつと唱えだした。

「如是我聞、仏がかつて西洋の海中にいらっしゃったとき、婆沙国が献上した大きな河豚を食せられた。仏の頂きの上には千万の光明が放たれ、時に比丘および大衆は仏を礼拝し、つつしんで仏のことばを聞いた。仏は大衆に告げていわれた。河豚は大海の中に住まい、清浄な水を飲み、清浄な土を食している。私にとっては無上の妙味であると」

これを聞いていた者は抱腹絶倒した。

賈秀才は清源寺に住まうことおよそ一年で、どこかに立ち去った。

不思議なことだ。賈秀才の人となりは。奇異の才能を抱き、卓越した意志をもちながら、どうしてほしいままに狂態を演じ、人びとに自身の真の姿を見せなかったのか。昔のいわゆる隠君子の類であろうか。

駒城^{クソン}に住んでいらっしゃる叔父^{チヨン}の鄭氏がわたくしを廬陵まで訪ねて来られ、この話をはなはだ子細にはなして下さった。わたくしは賈秀才に会いたくて清源寺まで足を運んだが、彼が立ち去ってすでに三日が経っていた。

（『潭庭遺藁・丹良稗史』）

1) 赤城県：京畿道陽城の昔の名。

2) 呂不韋：中国、戦国時代の人。もとは商人で、趙に人質になっていた秦の王

子の子楚に取り入り、また自身の子を宿している妾を子楚に献じた。子楚は秦にもどって太子となり、やがて即位して莊襄王となる。妾の産んだ子の政は莊襄王が亡くなると秦王となる（後の始皇帝）。呂不韋は政にとっての実の父親であることになるが、相国として仕え、仲父と呼ばれた。莊襄王亡き後も呂不韋は政の母の太后と私通を続け、淫行の治まらない太后を満足させるために、男根の大きい嫪毐を宦官に見せかけて太后に仕えさせた。そのことが発覚して、太后と嫪毐の間にできた二子は殺され、嫪毐とその三族は皆殺しになり、太后は雍に遷された。政は実の父の呂不韋も殺したかったが、蜀に居住させるにとどめた。呂不韋はいずれ殺されるだろうと思い、酖毒を飲んで死んだ。

3) 「遠別離詩」：李白の詩。

古、皇・英の二女有り、乃ち洞庭の南。

瀟・湘の浦に在り、海水直ちに下る萬里の深きに。

誰人か此の離れの苦しみを言はざらん、日は慘慘として雲は冥冥たり。

猩猩^{しょうじょう}、煙に啼いて、鬼は雨に嘯く。

雷は憑憑として吼へ怒らんと欲す 堯・舜之に當って亦た禹に禪る。

君、臣を失へば、龍は魚に為り、權、臣に歸すれば、鼠は虎に變ず

或は雲ふ、堯は幽囚せられ、舜は野死すと。

九疑、聯綿として皆相ひ似たり、重瞳の孤墳、竟に何れか是なる。

帝子は泣く、綠雲の間。風波に随って、去って還ること無し。

慟哭して遠く望めば、蒼梧の深山を見る。

蒼梧山崩れて湘水絶えなば、竹上の涙、乃ち滅す可けん。

古有皇英之二女 乃在洞庭之南

瀟湘之浦 海水直下萬里深

誰人不言此離苦 日慘慘兮雲冥冥

猩猩啼煙兮鬼嘯雨

我縦言之將何補 皇穹竊恐不照余之忠誠
雷憑憑兮欲吼怒 堯舜當之亦禪禹
君失臣兮龍為魚 權歸臣兮鼠變虎
或雲堯幽囚 舜野死
九疑聯綿皆相似 重瞳孤墳竟何是
帝子泣兮綠雲間 隨風波兮去無還
慟哭兮遠望 見蒼梧之深山
蒼梧山崩湘水絕 竹上之淚乃可滅
帝子泣兮綠雲間 隨風波兮去無還
慟哭兮遠望 見蒼梧之深山
蒼梧山崩湘水絕 竹上之淚乃可滅

- 4) 黄耆老:朝鮮, 忠宗, 明宗のときの名筆。字は鮎叟, 号は孤山, あるいは梅鶴。本貫は徳山。1534 年, 進士に合格, 官職は別坐を勤めた。晩年, 亭子を洛東江の西の宝泉山の上に造り, その名を孤山亭, あるいは梅鶴亭とした。筆法が抜きんでていて, 筆聖と呼ばれた。

五十一、教室の外で学んだ奴僕のパク突夢

バクトルモン・キインコンイン¹⁾の金氏の奴僕であった。字を書いて自らの意志を表すことができたが, 身分が賤しいために師匠について学ぶことができなかった。金家の子どもが堂軒に座って読書をする。突夢は後ろの階段でそれを見ていた。その意義を理解することはできなかったが, その読むのを聞いて文字の音は覚えることができた。子どもが忘れて, かえって突夢に尋ねるほどであった。

隣に丁先生という人が住んでいて, 家で子どもたちに教えていた。突夢は結婚して後に, 丁先生のもとに行って, 門下で学ぶことを請うと, 丁先

生はこれを許した。突夢は毎日、朝起きるとすぐに、書物を懷にして丁先生の家の門前に立って待ち、門が開くと、丁先生が寝ている部屋の戸の外で肅々と先生の起きるのを待った。先生は突夢が来ていることを知って、窓越しに、

「突夢は来ているか」

と尋ねると、突夢は、

「はい、参っております」

と答えた。

しばらくして、大勢の弟子たちがやって来て、堂上に上ると、突夢はいやしい毛笠をかぶった姿で書房や道令といったお坊ちゃんに交わるのを憚って、背をかがめてあえて堂上には上ろうとはしなかった。丁先生は臨時の方便として突夢に折風巾²⁾をかぶって出て来るようにさせた。授業が終われば、主家に帰って雑役を行うのは以前と変わらないので、金家では突夢が隣家で学んでいることを知らなかった。

一年あまりが経って、『小学』・『論語』・『孟子』を学び、文章の理解が日々に進んで、丁先生もはなはだ奇特だと感心した。松明をしばり、薪を割ることが彼の仕事であったが、斧をふるい、縄で薪の束を作るあいだにも、口で書物を口ずさむことを止めなかった。家の人たちは彼をただの阿呆のように思っていた。

ある日、突夢は瘡^{おこり}を思い、金氏の家では仕事を休んで、養生させた。しかし、突夢は妻に、

「これぞ読書の秋^{とき}だ」

というと、冠をかぶって端坐して書物を読んだ。瘡の症状がひどくなり、悪寒がして、歯ががちがちといったが、突夢はいよいよ坐を正して、書物を読むことを止めなかった。三日もそうしていると、瘡はすっかり治癒した。

その後、妻といっしょに蕩春川に洗濯に行ったことがあった。その川には平たい石がたくさんあった。突夢は洗濯を終えて石の上に行った。冠もかぶらず、股引をずり挙げて、石の上に座った。石のくぼみで墨を磨り、大きな筆を執って、『小学』の題字を書いた。文字が石の表面に淋漓と現れ、日が西に傾くと、木陰に臥して声を上げて長く吟じたが、悠々自得している様子に見えた。

趙判書チョの家チョの若い兩班がたまたま蕩春川に遊びに来ていて、その様子を見て奇異に思い、大声を出して尋ねた。

「お前は何をしている者だ」

突夢はおもむろに起き上がって答えた。

「ある家の奴です」

「お前の主人は人とはいえないな。どうして経伝の教養があつて、人の奴などしているのか。わたしがお前のために、お前の主人に掛け合つて、免賤させるようにしてやろう」

「この奴のために年老いた主人が気を病むようなことは、義においてあえてできないことです」

こうした受け答えを聞いて、その兩班はいよいよ驚いた。

金家の息子は大人になるに及んで、品行が悪くなり、学問などすることがない。その父が怒って、

「お前はぶらぶらと遊んでいるばかりで、愚かな振る舞いをして、まるで禽獸にことなるところがない。あの突夢の方がなんぼうかしました」と叱りつけた。

息子は父親からこのように何度も叱られるようになると、どこにも怒りをぶつけるところがなく、突夢を見かけると、つかかって来て、鞭や棍棒で殴り付けた。突夢は、

「わたくしがむしろ避けて主人の家の父と子のあいだが和睦するように

はかろう」

といい、病気を言い訳に、仕事を休んで、他家の婢である妻のところに移った。

息子はそれでも突夢に対する恨みを解くことなく、妻の家にいる突夢に事を構えてさまざまに嫌がらせをする。主人たちも突夢夫婦を疑うようになった。突夢はため息をついて、

「これもわたくしの運命なのだ。誰を怨むことがあろう」

といい、妻を引き連れて南陽郡をさまよい、籠を編んで生業とするようになった。そして、一年あまりが経ったとき、里正³⁾が郡に申請して、突夢を東伍軍⁴⁾に編入させた。突夢は心配した。

「籠を編んで口に糊して来たが、軍租を納めるにはどこに行けばいいのだろうか」

邑内では郷兵を募っていた。突夢は砲手として初試には合格したが、会試には落ちた。鬱々としてソウルのことを考えるようになり、ふたたび金氏の家に帰って行った。

しばらくして、獄吏となったが、四十歳あまりで死んだ。彼が獄吏になったのについては、趙兩班の力があつたのである。

丁先生の名前は致厚で、その人となりは淳素かつ篤学で、風水説に造詣があつた。若いときには校書館の小吏であつたが、まだ老いもしないのに病を口実として職を辞し、家で学徒たちを教えたのである。

- 1) 其人貢人：工曹に所属して、柴炭や松明の制作を請け負って納品する貢人。
- 2) 折風巾：もともとは高句麗の人たちの帽子で山形をしているもの。
- 3) 里正：里長。集落の世話役。
- 4) 東伍軍：豊臣秀吉の侵略以後に始まった軍制で、地方に居住する十五歳以上の男子を軍籍に編入して、平常時には軍布を納入させ、有事時には軍役に勤めさせたもの。

桃山学院大学 人間文化学会 会則

第1条（名称） 本学会は「桃山学院大学人間文化学会（英語名 St. Andrew's University Association for Research in the Humanities）」と称する。

第2条（目的） 本学会は、人間科学全般および大学教育に関する研究を行い、あわせて会員相互および学外関係者との学術交流を促進することをもって、その目的とする。

第3条（事務局） 本学会の事務局は桃山学院大学内におく。

第4条（事業） 本学会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 学会誌その他の編集
- 2 総会の開催
- 3 研究会・講演会その他集会の開催
- 4 その他本学会の目的を達成するために必要な事業

第5条 本学会の会員資格は次のとおりとする。

- 1 （正会員） 本学会の正会員は、桃山学院大学の専任教員で、本学会の目的に賛同する者。
- 2 （名誉会員） 本学会の正会員であって定年退職した者およびこれに準ずる者。なお、「準ずる者」とは、「選択定年制で退職する者」、「特任教員で退職する者」、「65歳以上70歳以前に自己都合で退職する者」、および、「勤続年数が20年を超えて自己都合で退職する者」のことである。
- 3 （準会員） 本学大学院文学研究科の修了生、大学院生、研究生、および大学院特別研究員。
- 4 正会員は、本学会の総会および第4条に定める各種事業に参画し、本学会の刊行物の配布を受ける。
- 5 名誉会員および準会員は本学会の開催する大会、研究会、講演会等に参加し、また本学会の機関誌などの刊行物の配布を受けることができる。
- 6 （入会） 本学会への入会を希望する者は、本学会役員会の推薦および学会総会の審議で決定する。

（退会） 本学会の退会を希望する者は、本学会役員会に退会届を提出し、学会総会の審議で決定する。

第6条（学会誌） 本学会の学会誌は『人間文化研究』（英語名 Journal of Humanities Research）と称する。

- 2 学会誌の編集は本学会の責任において行い、発行は桃山学院大学総合研究所が行う。
- 3 学会誌の発行は、原則として年2回とする。
- 4 学会誌への投稿規定は、別に定める。

第7条（会費） 正会員は年額3,000円の会費を納入する。

第8条（役員）

- 1 本学会に次の役員をおく。

(1) 会長	1名
(2) 理事	庶務 1名
	編集 1名

会計 1名

(3) 監査 1名

2 役員はすべて総会において正会員の互選により選出し、その任期は原則として2年間とする。

3 会長は本学会を代表し、会務を総括する。

4 理事は学会誌編集責任者、会計責任者、大会庶務担当者とし、会長を補佐して会務を運営する。

5 監査は本学会の会計監査を行う。

第9条（総会） 本学会は毎年度2回総会を開催する。

2 会長は、その必要を認めるときは、臨時に総会を招集することができる。

第10条（会計および監査） 本学会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

2 監査は毎年度本学会の会計監査を行い、これを総会に報告して承認を得なければならない。

第11条（議決） 本学会会則の改訂は、役員会の議を経て、総会の過半数でこれを行う。

附則 この会則は2014年4月1日より施行する。

この会則は2024年4月1日より改訂施行する。

桃山学院大学『人間文化研究』投稿規程

1. (1) 本誌に投稿できる者は、原則として本学会の正会員、名誉会員、準会員とする。
(2) 編集委員会は本学会会長および編集担当理事によって構成する。
(3) 掲載の可否については、人間文化学会役員会の合議(役員会)で決定する。
(4) 準会員による投稿については、本学会の正会員または名誉会員の推薦を必要とし、さらに、編集委員会が選定し、役員会が承認した本学会正会員または名誉会員(合計2名)の審査員による学術的評価を得なければならない。準会員の論文については、学会誌への掲載は、論文審査結果を踏まえて、役員会の審議を経て、決定する。
(5) 本学会の会員以外の者の投稿は、本学会正会員または名誉会員の推薦を必要とし、さらに、編集委員会が選定し、役員会が承認した本学会正会員または名誉会員(合計2名)の審査員による学術的評価を得なければならない。会員以外の者の論文については、学会誌への掲載は、論文審査結果を踏まえて、役員会の審議を経て、決定する。
(6) 特別号発行の際、役員会の審議を経て、外部の研究者等に寄稿を依頼することができる。
2. 投稿は、論文、研究ノート、翻訳、資料、書誌、書評、その他とするが、編集委員会は種別を変更することがある。投稿原稿は未発表の原稿に限る。ただし、口頭発表を基に作成した原稿は投稿できる。
3. 原稿はワープロで作成する。原稿の分量は、論文および翻訳で20,000語(欧文の場合は、10,000語)、論文以外は12,000語(欧文6,000語)を限度とする。
4. 投稿には英文タイトルを別記し、論文の場合には500語程度の英文抄録を添付すること。論文以外の場合は、英文抄録を付するかどうかは投稿者の意向に委ねる。また、論文、研究ノートには、5語以内のキーワードを記載する。
5. 原稿は完成原稿を提出し、校正に際して大量の修正、追加は認められない。
6. 投稿者による校正は原則として再校までとし、定められた期日内に校正刷りを返却すること。
7. (1) 英文校閲(英文タイトルと英文抄録)は、掲載が決定した論文(正会員、名誉会員、準会員)については、桃山学院大学総合研究所に委託する。なお、校閲料は人間文化学会が支払う。
(2) 会員以外の者の論文は、投稿時には英文校閲を完了していなければならない。なお、英文校閲者の氏名と所属を投稿申込書に明記すること。
(3) 特別号発行の際に投稿依頼した原稿については、英文校閲(英文タイトルと英文抄録)は桃山学院大学総合研究所に委託する。なお、校閲料は人間文化学会が支払う。
8. 準会員、および会員以外の投稿時の審査員には、一定の報酬を支払う(1件につき、5,000円)。
9. 特別号発行の際、外部の研究者等に寄稿依頼を行ったときには、謝礼を支払うことができる。謝礼の額は役員会で決定する。
10. 本誌に掲載された論文等の著作権のうち、「複製権」と「公衆送信権」の行

使は、桃山学院大学総合研究所に委託する。

11. 本誌に掲載された論文等については、桃山学院大学学術機関リポジトリに公開することを原則とする。
12. 本規程の改訂は、役員会の議を経て、総会の過半数でこれを行う。

附則 この規程は 2014 年 4 月 1 日より施行する。
この規程は 2023 年 7 月 31 日より改訂施行する。
この規程は 2023 年 9 月 30 日より改訂施行する。
この規程は 2025 年 7 月 19 日より改訂施行する。

執筆者紹介

(掲載順)

鈞井千恵
(TSURII Chie)

国際教養学部准教授

応用言語学
英語教育学

鄭京淑
(CHUNG Kyungsuk)

本学兼任講師

英語教育

斉藤倫子
(SAITO Tomoko)

本学兼任講師

第二言語習得
早期英語教育

大河内瞳
(OKAWACHI Hitomi)

国際教養学部准教授

日本語教育

梅山秀幸
(UMEYAMA Hideyuki)

本学名誉教授

日本文化史
比較文学

人間文化学会役員（2025 年度）

会 長 ：有 川 康 二

理 事（編集）：片 平 幸

理 事（庶務）：ÁLVAREZ PEREIRA Abel

理 事（会計）：大河内 瞳

監 事 ：松 澤 俊 二

2025年10月10日発行

人 間 文 化 研 究

第 23 号

編 集 桃 山 学 院 大 学 人 間 文 化 学 会
発 行 桃 山 学 院 大 学 総 合 研 究 所
594-1198 大阪府和泉市まなび野1番1号
TEL. 0725-92-7129

印刷所 友 野 印 刷 株 式 会 社
700-0035 岡 山 市 北 区 高 柳 西 町 1 - 23
TEL. 086-255-1101（代表）

Journal of Humanities Research

St. Andrew's University

No. 23 October 2025

CONTENTS

Article

- Exploring the Impact of Retelling on Learners' Awareness
and Input Quality in Extensive Reading Instruction
..... TSURII Chie (1)
CHUNG Kyungsuk
SAITO Tomoko

Practice Report

- Exchange Meeting between University Students Studying Japanese
Language Education and Foreigners Working in Japan:
What Japanese Language Course Can Offer to Students
Who Are not Aiming to Become Japanese Language Teachers
..... OKAWACHI Hitomi (31)

Translation

- Chinese Classic Style Novels of Jeoseon Period (V)
..... UMEYAMA Hideyuki (59)

~~~~~  
Published by the Research Institute,  
St. Andrew's University

1-1 Manabino, Izumi, Osaka 594-1198, Japan  
~~~~~